



TITLE:

人文 第64号

AUTHOR(S):

CITATION:

人文 第64号. 人文 2017, 64: 1-55

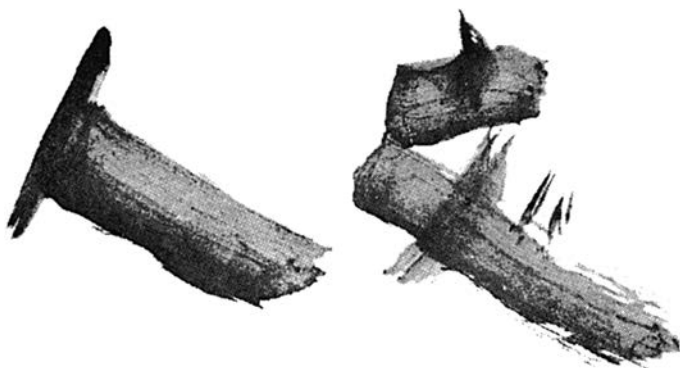
ISSUE DATE:

2017-06-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/226518>

RIGHT:



第 六 四 号



2017

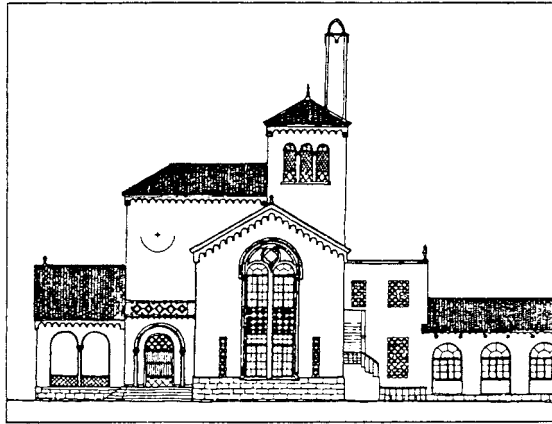
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

人 文 第 六 四 号

2016年4月—2017年3月

も く じ



随想	1
川向うの風景	大浦 康介
二度と行きたくない国	富谷 至
「逃げ水」を追い続ける	山室 信一
講演	10
夏期公開講座「名作再読」	10
出来の悪い正史——『晋書』	藤井 律之
マルグリット・デュラス『愛人（ラマン）』をいま読みなおす	森本 淳生
『韓非子』を読む	富谷 至
講演会 ポスターギャラリー 二〇一六	16
彙報	20
共同研究の話題	25
「生きもの」としての共同研究班、または環世界の人文文学	石井 美保
発言と沈黙——「人文情報学の基礎研究」研究班を振り返る	ウイッテルン・クリスティアン
『文史通義』会読この二年	古勝 隆一
盗掘簡を読む	宮宅 潔
所のうち・そと	33
ハンブルク再訪	永田 知之
「文献屋」のフィールドワーク	藤井 正人
オデュッセウスの教訓	藤井 俊之
その他	40
『日本京都大学蔵中国歴代碑刻文字拓本』に関して	安岡 孝一
書いたもの一覧	42

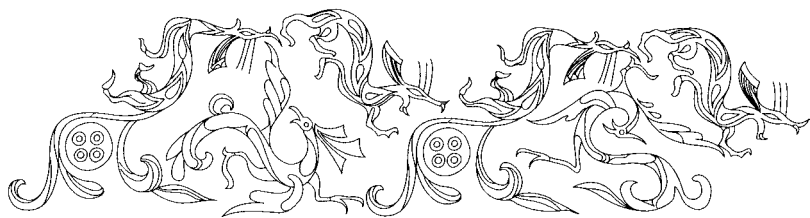
川向うの風景

大 浦 康 介

ここ十数年、人文研では大きな出来事がいくつかあった。激動の時期だったと言っていいたいだろう。いうまでもなく拠点化がそのひとつだが、組織改編は人文研だけにかかわることではない。人文研に個別にかかわる大事件はやはり本館の所屋移転だろう。この引越しの「意味」は、引越し作業の慌ただしさとその後の忙しさのなかでうやむやにされた感がある。

移転前、人文研は「一軒家」だった。助手も所員も事務員もそこに「住んでいた」。談話室では長老たちが将棋を打ち、昼休みにはバドミントンに興じる人々の歓声が中庭にこだました。私のように夜にならないと「帰宅」しない人間もいたが、そこが「我が家」だったことに変わりはない。「所員」はいまや死語だが、「所員」の「所」はなによりも場所のこと、家屋のことではなかったかと思う。

ボロい一軒家から、新築ではないがリフォームしたてのマンションに引っ越した。そのマンションはしかも広い団地内の一棟である。「学内」感が高まり、機能的空間になり、警備体制



も整い、他学部はもちろん学生との距離も縮まった。これを私たちが手放して喜んだとは思わないが（人によって温度差もあるだろう）、次々と押し寄せる新たな課題を前に、移転決定そのものが孕んでいた「苦さ」はしだいに共有されなくなっていた。「大家さん」から立ち退きを要求されてやむなく引越したのだということも、当局の支離滅裂な説明（人文研跡地は売却すべき「資産」と考えている云々）も、誰も話題にしなくなった。しても詮ないことである。恨み節に意味はない。それにしよせん「借家人」の身分である。しかし、次に入った「借家人」のピカピカのネームプレートを見ると、また新たに甦ったボロ家の全貌を目にすると、人文研の移転もまた世にいう「人文学の凋落」のひとつの兆候だと思わずにいられるだろうか。

旧所屋は東大路という広い「川」で大学本部から隔てられていた。このことは大きい。大学で起こっていることは、「川向う」の、「対岸」の出来事だった。この位置関係が、良くも悪くも、人文研の「構え」のようなものを決定づけていたように思う。そして「川」を渡った今、深層において変わったのは（変わらされたのは）この「構え」だったのではないかと思う。建物じたいも、今にして思えば奇妙な代物だった。いびつで不揃いの研究室、変に折れ曲がった廊下、吹き抜けの、異様に天井が高い大会議室、秘密の迷路のような西館……。そこには無駄な場所、用途のはっきりしないエリアがあった。そうした



グレーゾーンが大学から一掃されつつある今日、あれは案外貴重な空間だったのかもしれない。なんの個性もない今の所屋を舞台に小説は書けそうにないが、あの建物だったら可能であるような気がする。

現実の私は旧所屋の前を通つても立ち止まることはないが、夢想のなかの私は、ときにあの建物の前で立ち止まり、時間の観念を失った老人のように、中をのぞき込もうとする。

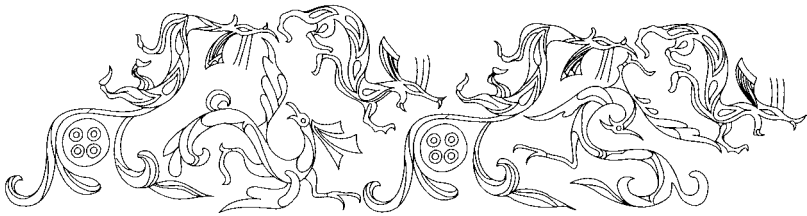
二度と行きたくない国

富谷 至

私は、四十歳を越えた頃から、外国に行く機会が増え、訪れる国も多種にわたった。その中で二度とは行きたくない国がある。インドである。

なにもインド、インド人が嫌いだからではない。以下に述べるように、インドで直面することが、私をして当惑させ、考え方を改めて問い直させる、それを経験することがなんともいやだからである。

そもそもインドは、私にとって、あまり関係のない国であつ



た。インドの思想、歴史、宗教など、私はそれほど関心もたなかった。インド料理店にも積極的に行こうとも思わなかった。その私がインドに行くハメとなったのは、デリーの国立博物館のスタインコレクションを調査するためであり、実物調査の許可願いを日本から送っていたが、いっこうに音沙汰がない。インドをよく知る友人にそのことをほやくと、「何も知らんヤツだ。それがインドのやり方で、返事などくるものか。直接当地にいつて交渉するのだ」と忠告され、渋々デリーに出張したのである。

インドのそういうやり方が気に入らないのではない。インドの地を踏んでみて、実体験したのは、大きな貧富の差であった。今日ではその差は縮小しているのかもしれない。しかし、私が訪れた十数年前は、豪華ホテルから一步出ると、そこには貧民街が広がっており、信号待ちをしいる車の窓ガラスをたたいて物乞いする母子がおり、怪しいものを売る露天商が道路のあちこちに店をひろげ客を勧誘する、そういった風景であった。

それを私が嫌悪したのでもない。そのような風景、社会環境は、世界中どこでもあることだろう。

私に嫌厭の感を抱かせたのは、貧富の差というものが、価値観を相対化させ、そこから絶対的であるはずの罪悪の意識を相対化させ、ひいては自律にたいする自信をもてなくさせるということを改めて思い知らされたことである。

いま、日本円で千円がある。日本の千円は、インドでは数倍



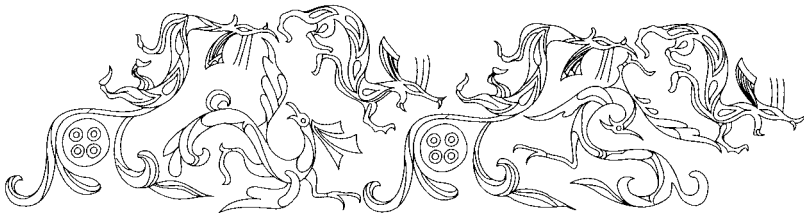
の価値にあたる。つまり金銭の価値は貧富の差によって相対化され、金銭資産の絶対的分量から、その価値の質的差へとつながる。これもだれもが知っている異なる国で生ずる市場価格の常識である。

しかし、問題は経済の領域に止まらず、それが罪悪意識という法律・犯罪の領域に関連していくのである。

我々日本人にとって、千円を不当に損失すれば、確かに腹立たしいが、被害意識は、それほど強いのかといえば、どうであろう。一方、日本の千円がその数倍の価値をもつ貧困な社会の構成員が、日本の旅行者から不正な手段で千円を詐取、窃盗する。さらに被害者の被害意識がそれほどのものではなく、加害者が得る利益の方が遥かにまさるということを知悉していたなら、相手にとっては、一食のハンバーガー代ぐらいのものが、自分にとっては数日間の食費となるなら、被害者の罪悪感、それほど大きくはなくなってしまう。少々の不法行為は許されるのではないかと。

罪悪感とは所詮相対的なものであり、立場が逆なら、私自身もそういった犯罪を行うかもしれない、貧困のまえには絶対的倫理観など存在しない。そういったことを思い知らされ、考えさせられる、自律性の弱さを知らされ、自己嫌悪におちいる。

だから私は、インドには行きたくないのだ。



「逃げ水」を追いつける

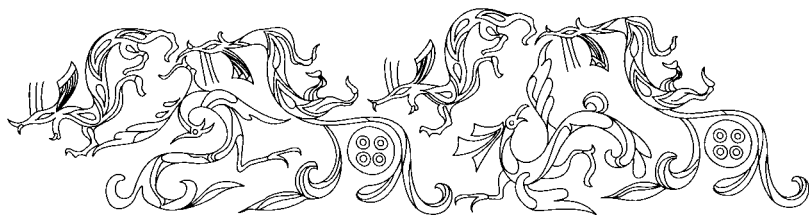
山 室 信 一

顧みれば、東京大学社会科学研究所に始まり、東北大学文学部附属日本文化研究施設を経て、人文科学研究所を退くまで、私の研究所生活は三九年の星霜を経た。この間、何よりも僥倖であったのは、個性溢れる師友との邂逅であったことを改めて痛感する。

あの時、そこで誰がどういう表情で、何を語られたのか——それらを正確に再現できるわけでは勿論ない。しかし、背景にあつた部屋の様子や調査先などの風景などと一体となつて、語られた言葉は深く脳裡に刻まれ、折につけ、「ああ、そういう意味だったのか」と得心することを重ねてきた。歳月を経て、それらの方々と幽明その界さかいを異にすることが多くなればなるだけ、思いもかけない時に、その場面が鮮やかに蘇ってくる。

そして、今にして想う。「そうだ、この記憶こそが他の何ものにも代えがたい、かけがえのない宝なのだ」と。

だが、その宝をどこまで生かし得て来たのか——その回答を出すことは自分では出来ないままに終わるであろう。ただ、全

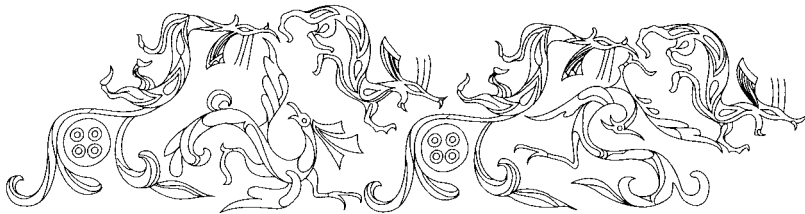


き回答は出せないにせよ、自分なりの回答を今後とも重ねて行きたいと思う。それが戴いた多大な学恩に報じる唯一の方途であるに違いないからである。

それでは、結局、私は何を課題としてきたのだろうか。

確かなことは、明治という時代、日本という空間を最初の研究対象として選んだ時の初志が、「現在の自分が立つ、この地点の出発点を確認したい」という想いであった。それを覚えているのは、東京大学社会科学研究所での助手面接試験で、「何のために研究したいのか？」と問われて、そう答えたからである。とは言え、何をどう研究すれば良いかといったことが分かっていた訳でもない。ただ漠然と欧米のみならずアジアと直接に交流するようになった明治日本人々の思想を知ること、
「近代」と「世界」についても知ることができるのではないかという予感めいたものがあつたに過ぎない。しかし、「現在の自分が立つ」地歩は、それ自体が日々動いている以上、永久に辿り着けない「逃げ水」を追う営為に他ならなかった。

そして、愚鈍な私が「近代」について思いあぐねている間に、学界では「ポストモダン」論が流行し、「言語論的転回」が叫ばれて、実証主義史学などは自己満足の遺物に過ぎないと唾棄されるような思潮となった。何よりも皮肉なことに、私が赴任した当時の人文研は、フランス現代思想の最先端を疾走するニューアカデミズムの旗頭でもあるかのように喧伝され、一種の社会現象となっていた。さらにまた国際日本文化研究センター

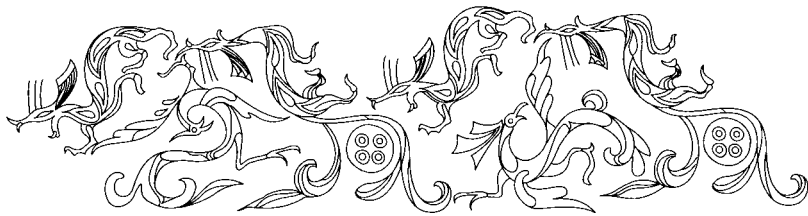


が発足したことで、人文研の日本研究はその使命を終えて衰退の一途を辿っているという論調がジャーナリズムでは躍っていた。

そうした外からの眼差しを意識しながらも、史料を集めては読み解く作業に徹することこそが時勢に流されない唯一の道ではないと思った。そして、海外の最新理論を導入し、それを当て嵌めてみせる才筆を競うのではなく、いかに稚拙で不細工であれ自分が読んだ史料から導き出される概念や視座を提示していくしかないと思ふ。

このような方向を選び取るにあたっては、東大部や西洋部の研究班の末席に加えて戴いた体験に依るところが大きかった。それは門外漢として、ただ出席して耳学問をしたというに過ぎなかったが、史料の解釈をめぐる展開される議論の場に立ち会う時間を重ねるだけで自分が知らない地平が拓かれるような感覚に促された。史料文献を原文で読むことはできなくとも、翻訳や関連資料などを探し出して読み続けることで日本が置かれた「近代」と「世界」の布置状況が、臍気ながらも見えてくるような触感があった。

ただ、東大部や西洋部の研究班からは、一方的に恩恵を受けただけで何一つ応えることができなかった。その点では、今でも忸怩たるものがあり、この悔悟の念は消え去ることはないであろう。しかし、「世界」各地域の研究者を網羅している人文

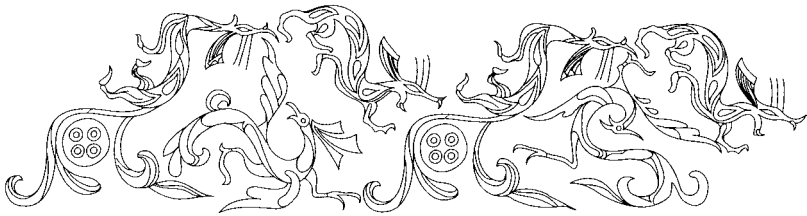


研の最大の特質を活用しないことほど、研究者という以前に一人の人間としての人生にとつての損失はない。何よりも東洋部や西洋部の研究班では、通常では出会う機会もない多種多様な専門分野や異業種の方々とも面識を得ることができ、研究班が終わってから交流が続いている方が少なくない。そうした方々こそ、自分の研究分野に閉じこもりがちな研究所生活外に向けて開かれた窓口となった。

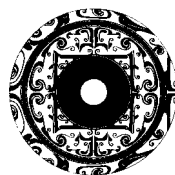
さて、研究対象は共同研究班などのテーマによって変わってきたものの、「現在の自分が立つ、この地点の出発点を確認したい」という研究者となるにあたって抱いた初志は、自分なりに通底していたように思う。この研究課題は、自らがどういう時代、いかなる空間に立っているのかという、極めて私的な問題意識に過ぎない。しかし、何が「普遍」で何が「特殊」なのかを見きわめることが人文・社会科学に通有の、そして最終的課題ではないかと私は考えている。そして、私自身は参加した共同研究班において、その研究テーマという鏡に照らし合わせながら、この問題を考えてきたつもりでいる。

最後の共同研究班である「現代／世界とは何か？——人文学の視点から」は、まさにこの問題を真正面に据えた、私にとつて「復初」のテーマであった。

そして、それは、いつも眼前にありながら、終生、そこに辿りつけない課題としてある。



講演



夏期公開講座

「名作再読」

出来の悪い正史——『晋書』

藤井律之

『晋書』とは、唐の貞観二十二年（六四八）に成った中国の正史のひとつである。撰者は、房玄齡を代表とする二一名からなり、太宗・李世民の勅を奉じて編纂したものであるが、太宗自身が筆を執った箇所もあるので、太宗御撰とされることもある。じつさい、日本最古の図書目録である『日本国見在書目録』では、

「唐太宗文皇製」とされており、古代日本においても盛んに書写された史書である。

『晋書』には数多くの特色があり、たとえば、列伝は仏図澄や鳩摩羅什など僧侶の伝記を含み、また載記は、いわゆる五胡十六国を取り扱ったものであり、当該時代について知るためには必要不可欠な史書なのが、成立した当初から、同書は批判の対象となった。

批判の理由は複数あるが、最初期の批判は劉知幾（六六一―七二一）の『史通』にみえる。『史通』は、中国最初の史学理論書であるが、その中で劉知幾は『晋書』の編纂者に文学者が多く選ばれたために、歴史書にはふさわしくない軽薄な文章が用いられたこと、また『世説新語』や『搜神記』のような歴史史料としてふさわしくない（と劉知幾がみなしていた）小話や怪談を、史料批判することなくそのまま転載したことを強く非難する。

劉知幾の批判のうち、後者について理解するため、陳寿の『三国志』をとりあげ、五丈原の戦いの描写を比較してみると、『三国志』の描写は、のちに『三国演义』の名場面のひとつとなったとは到底思えないほど、はなはだ無味乾燥である。これが講談へと発展するための素材となったのは、のちに南朝宋の裴松之が注として拾い上げてくれた稗史であり、それがなければ

ば、「死せる諸葛（孔明）、生ける司馬（仲達）を走らす」という俗諺は忘れ去られ、「星落秋風五丈原」という名文句も生まれ得なかった可能性は高かったであろう。

対する『晋書』は、五丈原の戦いの描写にそうした稗史の記述を積極的に取り込んでおり、劉知幾の言う、取るに足らない史料をそのまま載せたという批判は、読者に楽しく読ませるための工夫であつたと評価することもできよう。

しかし、その工夫は、歴史書は面白くあるべきか否かという問題と直面せざるを得ない。この問題、換言すれば、歴史書に物語的要素はどこまで許容され得るのか、という問題は、中国のみならず、西洋においても、歴史学の起源を担ったヘロドトスとトゥキデデスの頃から議論されているのであり、少なくともわたくしには容易に答えられる問題ではない。

しかし、劉知幾には明確な解答があつた。彼にとつての理想の歴史書とは、史料批判——民間人の記録よりも公式の記録を、後人の伝承よりも同時代人の証言を重視する——を徹底的に行つた上で、可能な限り余計な叙述をそぎ落としたものであり、彼の目からすれば、あの『史記』とても『晋書』と五十歩百歩なのであつた。

劉知幾がここまで極端な理想を抱くに至つたのは、彼の史官時代の苦い経験にあつた。彼が史官であつたのは武則天の時代のことであつたが、生き抜く上で政治センスを必要としたこの時期に、彼は上司や同僚に恵まれず、史官の理想である直筆を貫くことができなかった。彼はさかのぼって太宗時代の修史事業——『晋書』編纂も含まれる——を検討しても、武則天期と大差ないと落胆してしまつたのである。ある意味、『晋書』の出来の悪さが、中国最初の歴史理論書の誕生に貢献したと言える。

『晋書』の他の欠点として、撰者が複数人であつたことが挙げられる。これは内藤湖南（一八六六—一九三四）による批判で、『晋書』編纂を契機に、かつては家学としての性質を備えていた史学が分業制へと変質し、結果、一史書内における統一的な歴史観が失われたことを批判したものである。

この批判は、集合知（集团的知性）は歴史叙述を担い得るか否か、という問いかけでもある。現代において、共同作業で通史を執筆することは珍しいことではなく、その批判として、執筆者間での意識共有が不充分という指摘も良く目にするからである。

あらゆるものが納得して共有し得るひとつの歴史観や歴史叙述を追及するのか、あるいは、個々人がそれ

どれ納得するものを追及するのか、この両者のどちらが健全なのか、これもまた容易に答えを出せる問題ではないが、少なくとも劉知幾は後者を選択した。

このように、出来が悪いと批判される『晋書』は、存外、歴史学の本質に関わる難題を提示しているように思われるのである。

マルグリット・デュラス『愛人 〈ラマン〉』をいま読みなおす

森 本 淳 生

二〇一六年は、マルグリット・デュラスが亡くなって二〇年になる。この節目の年に彼女の代表作である『愛人〈ラマン〉』を読みなおしてみたい。

一九八四年に刊行された『愛人』は、デュラスの少女時代の体験を題材とした作品である。デュラスとおぼしき少女が裕福な中国人青年と出会い、ふたりは愛人関係になる。しかし、フランスの植民地であったインドシナにおいて、フランス人と中国人のあいだには人種の壁、植民地主義的な偏見の壁があった。そうした中国人の愛人となり逢瀬を重ねるなかで、少女は現地のフランス人社会から非難されのけ者扱いされる。少女はいわば「売春婦」なのだ。『愛人』の眼目は、こうした何重にも疎外された男女の関係が、じつは本当の「愛」に値するものであるということを示す点にあったと言えるだろう。

この作品はジャン・ジャック・アノーによって映画化され記録的な観客動員を果たしたが、デュラスは大いに不満だったという。アノーは小説を、確定した事実からなるひとつの歴史／物語にしようとする。しかし、ひとりの人間が生きてきた〈生〉は無数の事実、経験、願望、空想などから織りなされていて、それを時系列に沿って整然と展開されるような整合的な物語にすることはできない。それでは、人生とは支離滅裂な断片からなる無意味なものなのか。デュラスはそれもちがうと言う。人生には言語化できない核のようなものはあり、それとの関係で人生には意味を与えることができる、しかし、この核は、実際に〈生〉を生きる現在においてははつきりと自覚できない、だからこそ過去の人生について後から回想し、妄想をも恐れず語りなおすことに意味があるので。

『愛人』の冒頭で語られる「存在しない写真」はまさにそうした表象できない核につながるものである。中国人青年が黒い豪華な自動車に乗ってメコン川の渡し場に現れ、渡し船のうえで二人が初めて言葉を交わした場面——自分の人生にとって決定的な意味を持つこの場面の写真は存在しない。ここから示唆されるのは、ふたりの関係が現実世界ではほとんど実現不可能な「愛」の関係であるということである（少女は帰国

の船のなかで初めて彼を愛していたかもしれないと思う）。このことを示すためには、愛を安易に成就させて甘ったるい言葉や恋愛の心理分析で小説を埋めるようなことは拒絶しなければならない。愛の実現を徹底して妨げるような道具立て——人種的・植民地主義的な隔たりや売春婦性——が必要になるのはそのためである。

『愛人』の「愛」は「不可能な愛」である。それは目に見えぬかたちで、つまりある種の〈不在〉、〈欠如〉として、人と人との間の関係に作用している。デュラスにとって書くこととは、こうした〈不在〉、〈欠如〉に触れ、それと自分を共振させる営みであった。停電した夜に少女を追いかけてきた女乞食や、若い愛人を自殺させたことで周囲から悪評を立てられ、ついには入水自殺したアンヌ・マリ・ストレットは、少女自身の愛欲、狂気、孤絶、そして死との関係を象徴する人物たちだった。中国人愛人との交情には、さらにデュラス自身のふたりの兄の影がつきまとい、そこには近親相姦的な欲望も潜んでいた。『愛人』とは、これらの形象を書くことで自分の奥底に潜む「形容不能なもの」を生きなおす試みであり、語ることでできないものを語るというこの逆説的な営みのためにデュラスがとった文体上の工夫が、あの「流れゆ

くエクリチュール」だったのである。

今日、『愛人』という作品はなによりも「妄想する権利」を私たちに示唆しているように思われる。それは、様々な規制が織りなす息苦しい現代社会のなかで内面、欲望、悦楽をほとんど失いかけている私たちに、なにか密かな空隙を穿つ可能性をもたしめてくれる。文学にもし意味があるとすれば、それはまさにこのような自由な行為のうちにしかないだろう。

『韓非子』を読む

富谷 至

韓非（?～B.C.233）は、戦国時代末、儒家の荀子に学び、儒家の礼説を發展させ、刑名思想を確立した法家の思想家として有名であり、『韓非子』五五篇は、その思想が余すところなく語られている。それはまた読み物としても大変面白い。

人間は打算に従って行動する。本能的打算を人性とみる韓非は、性善か性悪かという問題は、考慮の外にあった。また、主権者つまり皇帝と人民の間の契約が法律であり、罪と罰との明確な法定が契約内容だといった考え方は豪も存在しない。

韓非子は、人間の理性を視野には入れなかった。見方を変えれば韓非の刑罰、政治についての思想の欠落はそこにこそあったとも言えるが、ならば何故にそういった欠落が生じたのか、その依って来たるところはどこにあるのだろうか。

何よりもいえることは、韓非子が人間の性を考察する中で、善・悪の価値判断をその考察の対象におかず、

あるがままの現実にのみ立脚し、それを出発点としたことに由る。人性の善悪ということであれば、孟子や荀子の唱えるように、良識、善への志向といった個人の教化、さらには教化を受け入れる個人の理性的判断の有無ということが当然な板に登るであろう。しかしながら、韓非子はそれを考慮の外におき、損得に対して本能的に反応する人間の行動のみをとりあげ、それを肯定も否定もすることなく、現実として受け入れ利用することによって刑罰による威嚇、予防へと理論を積み上げていったのである。

韓非にとって重要なのは社会の安定秩序であり、社会を構成する人間集団をいかに統御するかが全ての課題であり、そのための人性の分析であった。従って統治の対象たる人間を集団としてとらえ、個人、個性には極めて冷淡である。

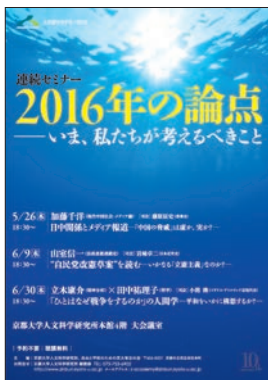
個性とは、人間を独立した人格をもつ存在と見て、その人格にそれぞれ固有の特徴を認めることであり、かつ個別の特徴は人間理性が創生するといつてよい。韓非子にはこういう発想はなかった、否、それはわかつていたのかも知れないが、少なくともそういう方向では考えなかった。

人間に共通した本性、それが損得に対する打算であるが、かかる本性をもつ人間が一般的な凡庸な人間で

あり、そういった輩が絶対多数を占める。韓非は事柄の分析と政策の遂行において常に視点を絶対多数に置いていた。人間でいうなら、同じような考えで行動する有象無象の凡庸に他ならない。

政治、統制はまずそれを認識して行わねばならない。それが現実を見据えた政治である。非打算的、理性的、物事の本質を理解する賢者、そういった人間はいるかもしれない、また教育も効果が無いわけでない。しかし、絶対多数をそのように教育し、またすべての人間を賢明にすることなど、できない。

圧倒的多数の凡庸を対象とするなかで欠落していくのは、人間個性、個人の素質、個人の能力であり、よし個人の能力を認めたとしてもそれが現実の政治へ与える効果は期待できないとし、そのうえ個性、才能ある有能な人物の出現は常態ではなく、それゆえ彼には現実的なものではなかったのである。



五月



講演会

ポスターギャラリー

二〇一六

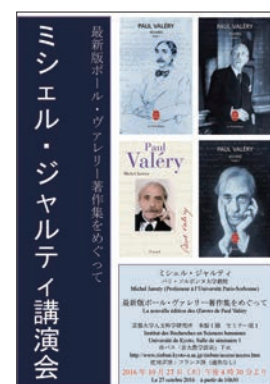
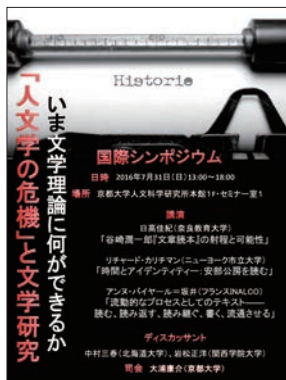


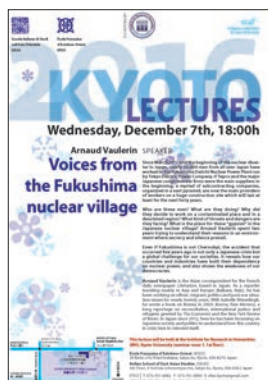
六月



七月







十二月



二月



一月





三月



彙報 〇一〇一六年四月より二〇一七年三月まで

おくりもの

。富谷至教授は第十回白川静記念東洋文学文化賞を受賞（二〇一六年十月十五日）

訃報

。佐々木克名誉教授（七五歳）は、七月三十一日逝去。

人のういき

。井波陵一教授（附属東アジア人文学報学研究センター）を人文学系長に併任（四月一日〜二〇一八年三月三十一日）
。稲葉稜教授（附属東アジア人文学報学研究センター）を附属東アジア人文学報学研究センター長に併任（四月一日〜二〇一七年三月三十一日）
。永田知之准教授（東方学研究所）は、附属東アジア人文学報学研究センターに配置換（四月一日付）
。中西竜也は、准教授（東方学研究所）

に採用（四月一日付）
。森本淳生は、准教授（人文学研究所）に採用（四月一日付）
。池田さなえは、助教（人文学研究所）に採用（四月一日付）
。徳永悠は、助教（人文学研究所）に採用（四月一日付）
。井狩彌介は、客員教授（文化研究創成研究部門、四月一日〜二〇一七年三月三十一日）
。JACQUET, Benoit Marcel Maurice フランス国立極東学院京都支部長は、客員准教授（文化研究創成研究部門、四月一日〜二〇一七年三月三十一日）
。武上真理子 人間文化研究機構地域研究推進センター研究員は、客員准教授（附属現代中国研究センター、四月一日〜二〇一七年三月三十一日）
。藤本幸夫は、特任教授（文化研究創成研究部門、四月一日〜二〇一七年三月三十一日）
。VITA, Silvio 京都外国語大学教授は、

特任教授（四月一日〜二〇一七年三月三十一日）

。岩井茂樹教授は国際高等教育院に配置換の上、当研究所（東方学研究所）を併任（四月一日〜三月三十一日）

。籠谷直人教授は、大学院地球環境学堂に配置換の上、当研究所（人文学研究所）を併任（四月一日〜三月三十一日）
。土口史記助教（東方学研究所）は、辞任の上（二〇一七年三月三十一日付）、岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授に就任。

。大浦康介教授（人文学研究所）は、定年により退職（二〇一七年三月三十一日付）
。富谷至教授（東方学研究所）は、定年により退職（二〇一七年三月三十一日付）

。山室信一教授（人文学研究所）は、定年により退職（二〇一七年三月三十一日付）

海外での研究活動

。小川佐和子助教（人文学研究所）は、一部文部科学省科学研究費補助金によ

り二〇一五年八月十九日成田発、ウィーン大学、オーストリア・フィルム・アーカイヴ、オーストリア国立映画博物館、オーストリア国立演劇博物館、オーストリア国立図書館に於いて「十九世紀後半から二十世紀初頭の映画史・演劇史をめぐる日欧比較研究」に係る資料調査を行い、ブダペスト・オペレッタ・劇場および国立図書館に於いて「第一次世界大戦期および戦間期の大衆演劇（主にオペレッタ作品とその映画翻案）の調査を行い、二〇一六年五月十八日に一時帰国、早稲田大学演劇博物館に於いて、「比較映画史研究―無声映画期における反古典的形式の形成と展開―」に関する日本におけるオペレッタ映画の批評言説の調査を行い、京都大学に於いて映画とオペレッタをめぐる調査とインタビューを行い、五月二十六日に再出国、ブダペスト・オペレッタ劇場および国立図書館に於いて、第一次世界大戦期および戦間期の大衆演劇（主にオペレッタ作品とその映画翻案）の調査を行い、Gineteca di Bologna に於いて、ボロー

ニャ復元映画祭に参加し、一九一〇年代の映画の調査を行い、七月六日帰国。
。高木博志教授（人文学研究部）は、六月二五日大阪発、ハイデルベルグ大学に於いて、日本美術史の教育と研究および京都の近代史の講演を行い、ライプツィヒ大学に於いて、ハイデルベルグ大学学生の研修旅行を引率し、七月二六日帰国。

招へい研究員

- 。余 欣 復旦大学歴史学系教授
中世術数学の形成と日本的展開
（文化生成研究客員部門）
受入教員 武田教授
期間 四月二十日～七月十九日
JAMI, Catherine Florence The National Center for scientific Research, Research Director
梅文鼎の数学研究と和算への影響
（文化連関研究客員部門）
受入教員 武田教授
期間 六月十九日～九月十八日
。OTMAZGIN, Nissim ヘブライ大学
人文学部准教授

地政学とソフトパワー…東南アジアにおける日本の文化政策の一〇〇年
（文化生成研究客員部門）
受入教員 田中教授

期間 七月十一日～

二〇一七年一月十日

。WAHLQUIST, Hakan 王立科学アカデミー スウェーデン・ヘーデン財団常務理事
スウェーデン・ヘーデンと京都
（文化連関研究客員部門）
受入教員 富谷教授

期間 九月十四日～十二月十三日

。李 磊 華東師範大学歴史学系中国古代史教研室副教授
六朝時代の東アジア―中国王朝と日本・朝鮮との関係
（文化連関研究客員部門）
受入教員 富谷教授

期間 十二月十五日～

二〇一七年三月十四日

。巫 仁恕 中央研究院近代史研究所研究員
十九世紀後半中国の地域的消費と社会
變遷…同治期四川省巴県を中心に

(文化生成研究客員部門)

受入教員 村上准教授

期間 二〇一七年二月一日～

二〇一七年四月三十日

招へい外国人学者

。鄭 雅如 中央研究院歴史語言研究所

助研究員

比較の視点からみた魏晉南北朝期皇后・皇太后の国家体制における位置…五礼を中心とした考察

受入教員 富谷教授

期間 四月九日～四月二三日

。趙 立新 国立暨南国際大学歴史学系

助理教授

石刻史料にみえる北朝宗室の官歴について

受入教員 富谷教授

期間 四月九日～四月二三日

。堀口 典子 University of Tennessee, Associate Professor

食と記憶の言説―日本近代帝国をめぐる

受入教員 富谷教授

期間 七月二五日～十二月三一日

。周 佳 浙江大学古籍研究所講師

宋代官衙制度研究―墓誌史料からの考察を中心

受入教員 富谷教授

期間 八月一日～

二〇一七年三月三一日

。趙 晟佑 ソウル国立大学助教授

東アジア仏教にみえる末法思想の比較研究

受入教員 宮宅准教授

期間 八月一日～

二〇一七年七月三一日

。張 利軍 東北師範大学歴史文化学院

副教授

夏商周国家構造の考古学研究

受入教員 岡村教授

期間 九月二十日～

二〇一七年九月十九日

。張 忠煒 中国人民大学歴史系副教授

秦漢時代の法律認識―経学・讖緯・術数からみた―

受入教員 宮宅准教授

期間 十月一日～

二〇一七年九月三十日

。AROKAY, Judit ハイデルベルグ大

学日本学研究所教授

日本前近代の文字テクストのデジタル・マッピングとデジタル注釈

受入教員 大浦教授

期間 十一月十五日～

二〇一七年一月十三日

。陳 偉 武漢大学歴史学院教授

秦代出土文字史料の研究

受入教員 宮宅准教授

期間 十一月十七日～十二月四日

。劉 雅君 上海大学社会科学学院副教授

授

魏晉南北朝の外交史研究

受入教員 富谷教授

期間 十二月十五日～

二〇一七年三月十四日

。都 賢喆 延世大学校文科大学史学科

教授

高麗末における明・日本との詩文交流の意義

受入教員 矢木教授

期間 二〇一七年三月十六日～

二〇一八年二月二八日

外国人共同研究者

。Schermann, Sylke Ulrike

青島旧蔵ドイツ語文献中の法制関係資料の調査

受入教員 岩井教授

期間 二〇一二年四月一日～

二〇一七年三月二日（継続）

。TAJAN, Nicolas Pierre

トラウマと文明―「傷」の歴史からみた人類

受入教員 立木准教授

期間 二〇一五年四月一日～

二〇一七年三月二日（継続）

。鄭 琮樺 韓国映像資料院韓国映画史研究所専任研究員・慶熙大学演劇映画学科兼任教授

植民地近代の日本・朝鮮映画交渉に関する歴史的研究

受入教員 高木教授

期間 二〇一四年十一月二四日～

二〇一七年十一月二三日（継続）

。李 周炫 ソウル国立大学歴史研究所ユソン奨学財団奨学生

秦漢時代における国家の市場管理

受入教員 宮宅准教授

期間 八月三十日～

二〇一七年五月二二日

。TAN Delfin Sweimay Nanyang Technological University PhD candidate

日本とシンガポールにおける鯉と装飾魚養殖の科学史

受入教員 瀬戸口准教授

期間 九月十四日～

二〇一七年一月十五日

。ライル・デ・スーザ ロンドン大学バークベック校准講師

海外日系人の文学とディアスポラ・アイデンティティ

受入教員 竹沢教授

期間 九月一日～

二〇一八年八月二日（継続）

。張 俐盈 中央研究院中国文哲研究所院級博士後研究員

明代詩学と文化伝播を通して見た李白

受入教員 永田准教授

期間 七月三十日～九月三日

。PAPAZIAN, Frederic フランス国立科学研究センター科学史研究ラボ特

任ソフトウェア技術者

『百科全書』デジタル共同批評校訂版（ENCORE）構築のための技術開発

受入教員 王寺准教授

期間 二〇一七年二月二十日～

二〇一七年五月十三日

外国人研究生

。RUESCH, Markus

親鸞論―救済論と生々に関する研究

受入教員 大浦教授

期間 二〇一五年四月一日～

二〇一七年三月二日（継続）

。梁 鎮海 明清交替期の地域社会…自己文書の視角から

受入教員 岩井教授

期間 四月一日～

二〇一八年三月二日（継続）

受託研究員

。石 立善 上海師範大学哲学学院教授
日本所蔵漢籍古抄本に関する総合的研究

受入教員 古勝准教授

期間 二〇一七年三月一日～

二〇一七年八月三十一日

東アジア人文情報学研究所センター講習会

。二〇一六年度漢籍担当職員講習会（初級）

第一日（十月三日）

オリエンテーション 稲葉 穰

漢籍について（四部分類概説を含む） 永田 知之

カードの取り方―漢籍整理の実践 土口 史記

第二日（十月四日）

工具書について 高井 たかね

漢籍関連サイトの利用

附属図書館学術支援課電子リソース

掛 大西 賢人

実習を始めるにあたって 梶浦 晋

漢籍目録カード作成実習

第三日（十月五日）

目録検索とデータベース検索

安岡 孝一

漢籍データ入力実習（一）

第四日（十月六日）

和刻本について

文学研究科教授 宇佐美 文理

漢籍データ入力実習（二）

第五日（十月七日）

朝鮮本について 矢木 毅

実習解説 土口 史記

情報交換 安岡 孝一

。二〇一六年度漢籍担当職員講習会（中級）

第一日（十一月七日）

オリエンテーション 稲葉 穰

経部について 古勝 隆一

叢書部について 藤井 律之

叢書と漢籍データベース

安岡 孝一

第二日（十一月八日）

史部について 宮宅 潔

漢籍データ入力実習（二）

第三日（十一月九日）

子部について 中西 竜也

漢籍データ入力実習（二）

第四日（十一月十日）

集部について

人間・環境学研究科教授

道坂 昭廣

漢籍データ入力実習（三）

第五日（十一月十一日）

漢籍と情報処理

ウィットテルン・クリスティアン

実習解説 土口 史記

情報交換 安岡 孝一

お客さま

。四月八日 ドイツハンブルグ大学日本

学科教授 ヨルク・クヴェンツァー

他一名

（富谷、永田が対応した）

。四月二五日 華東政法大学教授、全国

外国法制史学会会長 何勤華 他六名

（井波、富谷が対応した）

「生きもの」としての共同研究 班、または環世界の人文文学

石井 美保

二〇一五年の春、大浦康介氏を班長として発足した共同研究班「環世界の人文文学―生きもの・なりわい・わざ」は、二年を経た二〇一七年の春にいったんの区切りをつけることになった。

この研究班では、「環世界」という言葉をキーワードとして、さまざまな思想的冒険ともいえる研究発表が繰り広げられてきたが、その理論的な支柱となったのは、「環世界」の概念を提起したユクスキユルの著作に加えて、その理論を独自に発展させたヴァイツゼッカーや木村敏らの著作である。

この二年間を通して、哲学・文学・歴史学・精神分析学、それに文化人類学や霊長類学といった多彩な専門をもつメンバーが、デカルトの動物論からアフリカの農村における人とサルの関係にいたるまで、多岐にわたる研究発表を行ってきた。このように書くと、研究班のテーマが広汎なあまりに、全体としてのまとまりがつかなくなってしまうのでは、と思われるかもしれない。

れない。だが不思議なことに、多岐にわたる発表群は回を重ねるごとに共鳴しあい、互いに通底する姿勢や主題が、次第に鮮明に浮かび上がってきたように思う。この研究班が発足した当初から意識されていた事柄ではあったが、それは、「人間とは何か」、「『生きていく』とはどういうことか」という問いを、人間ならざるものに重心をおきつつ、人間と非人間的存在の「あいだ」から、あるいは人間性の臨界から考えてみるという姿勢である。これまでの発表の中にくりかえし登場した論点は、人と動物の関係、パースペクティヴィズム、人を含む生きものと人工物を含めた環境との関係、そして生きものとその環世界との相互的な交渉とモノや力の循環、といったところかと思われるが、これらの論点は、近代人のみを「人間」とみなし、そのような「人間」を中心として世界を捉えようとする従来の人間中心主義的な世界観の見直しを迫るものであると同時に、人間と人間ならざるものからなる身のまわりの世界を、複数形の「環世界（Umwelten）」のひとつとして捉えなおすことをうながすものでもあった。

そしてまた、この共同研究班は、相異なる思考や発想の響き合いと絡み合いを通して成長していく、それ自体が「生きもの」めいた場でもあった。この点に関

して印象深かったのは、ある霊長類学者が発表の場でもらした、「今、自分にとってこの研究会が一番楽しい」という言葉である。同じ分野の研究者からなる普段の研究会とは違って、「いつも思いがけないコメントが飛んでくるから」と。この言葉は、共同研究会なるものの意義と醍醐味を端的に表している。異分野の研究者たちが、しかし相通じる問題意識をもって集うことから生まれる、啓示的なひらめきとアイデアの思いがけない連鎖。それは、「文理融合」や「学際的研究の促進」といった上からの掛け声によっては達成しない、自由で創発的な共同性の生成であるだろう。

三月十三日に京都大学時計台記念館百周年記念ホールで開催された退職記念講演会で、班長である大浦氏は「おしゃべり」の効用について話された。モノログではなく、一対一の「対話」という形式に縛られたものでもなく、人が他者とともに生きるといふ共同性の原型として、おしゃべりはある。居心地のよい親しさと緊張感の入り混じった、自由闊達な「おしゃべりの場」としての共同研究会。それが、大浦氏がその軽妙洒落な話術で創りだした、たぐいまれな空間だったのかもしれない。

この共同研究班は、そんな毎回の「おしゃべり」を通して、人を含む生きものとその環世界の創造的なあ

り方を探究してきたわけだが、このように考えると、この共同研究班そのものが、偶然性と創発性を帯びた、生命的で流体的な知の実践と生成の場であったことがわかる。この共同研究班の問題意識と気分を受け継ぎつつ、次年度から新たな共同研究班「生と創造の探究——環世界の人文学」が始まる。新しい研究班もまた、創発の驚きに満ちたおしゃべりの場になることを期待している。

発言と沈黙

——「人文情報学の基礎研究」研究班を振り返る

ウィツテルン・クリスティアン

大学に入った頃に古代ギリシャ哲学に関心があった、プラトンの問答など何話も読んだ。他に彼の「饗宴」（シユンポシオン）も特に印象的だった。事実ではなく、著者物、つまり作品であることは理解したが、それでもそこで描いていた雰囲気——真実へ向かって相手の意見を聴き、それを踏まえて自分の見方を確かめ

ると述べる——はとても魅力的であった。その頃は、カール・オットー・アーペルのコミュニケーション理論や超越論的なプラグマティズムに基づく会話、ユルゲン・ハーバーマスの「コミュニケーション的行為の理論」も話題になっていた。新しい知見は、生産的な会話で複数の人間が平等で非強制的な討論に基づいて行うべきだと私は思うようになった。

しかし、それを実現するのは簡単ではない。テュービンゲン大学の哲学部では学生運動を経て、私は籍を置いていた頃にはエルンスト・ブロッホも亡くなっていて、彼の痕跡も次第に消えていく状況だった。その理想を挙げて、大学の外に広がる社会まで影響及ぼうとしたのは、文学部のレトリック学科初代教授ワルター・イェンスとその弟子ゲルト・ユードイングのみだった。もちろん先生の知識と経験の方が遙に豊富であるが、学生から違う見解や違う角度からの考え方が提出されたら特に喜んで、それを自分の論点と合わせて新しい方向へ向かうということが時々あった。発言の頻度と沈黙の間取りはそのためのバランスの良い組み合わせになった。

それから随分後になるが、京都に留学する機会が与えられた。そこで始めて日本流の共同研究班の存在を知った。実際に始めて参加を認めて頂いたのは、入矢

義高先生と柳田聖山先生が共同主催した「正法眼蔵三百則」と、入矢先生の「唐代の禪語録」の研究班であり、花園大学の隣にある「禅文化研究所」で開催された。正直に言えば、その時は議論の内容は殆ど分からなかった。担当者は中国語のテクストを古代日本語のような読み方で読み上げて、日本語訳をつけて、それから膨大な数の注を並べた。発表を聞きながら眠りと戦うのは私一人だけではなかったが、その後の議論は本当に面白かった。特に先生が二人で主催した研究班には、それぞれの観点から物事の違う見方が時々伺えた。しかしこの二つの研究班でも、その後に参加した研究班でも共通に言えるのは、沈黙は成功の前提になるということだった。新しい発想、今まで見て来なかったテクストのニュアンス、先の発言に導きされた意外な発見などとは、その沈黙から生まれる。

そうして長い間グルメが料亭やレストランを回るように色々な研究班に参加した。みなテーマや進め方は違う。一つのテーマについて発表することもあり、班員それぞれ自分の研究を紹介することもあり、会読と発表型のミックス、発表とコメントータ、議論を中心とする研究班、一つのテーマと究明する研究班、作業を中心とする研究班、それぞれに得るものがあった。

やがて研究班を主催するようになって、立場が客で

はなく、料理人に変わった。メニューから食材、作り方、組み合わせ等を検討しなければならぬ。初めて班長の任務の重さを実感した。

今回の研究班は、共同利用・共同研究の一環で計画され、論文などで発表される研究成果だけではなく、研究者コミュニティへの貢献と利用者コミュニティの形成も要求される。さらに、今回人文情報学のテーマであり、文系の研究者が馴染みの概念のみにあらず、情報学などから慣れない言葉と以外の議論の展開も度々行うものになるはずだ。研究班の予定された成果は、編集文献学的な手法に基づいた新しい漢籍のテキスト・データベース、とそれを利用するためのツール。幅広い分野からの参加を呼びかけたが、初めから日程の調整は困難。その上、細かい方法的な議論と実装についての打ち合わせのような「開発者」の立場と、採録基準や分類方法、検索など内容に関する「利用者」の立場という性質の違う進め方が必要とされたので、定期的な例会と年に一、二回開く拡張研究会という二つの柱を立てて研究班の運営に当たった。場合によっては議論が少し横道へそれることもあったが、凡そ予定通りに進むことができたので、研究班の最後の拡張会議の時に「漢籍リポジトリ」の初公開を宣伝することができた。それは私が漢学の勉強を始め

た頃からの夢だったので、とっても嬉しく思った。初公開から一年が経った今、利用者の数は徐々に増えている、その方々もさらに拡大した研究班の班員と見なしたい。ここでも沈黙が多いが、時折メールなどを通じて発言もあり、資料の質や利用者の便につながっている。

しかし、そのデータベースは確かに始動したが、ゴールに到着するのはまだ随分時間かかりそう。今はその次の段階現在の研究班として「漢籍リポジトリ」の基礎的研究」に取りかかっている最中だ。

『文史通義』会読この二年

古 勝 隆 一

「人心の同じからざること、其の面の如し」（『春秋左氏伝』襄公三十一年）と古人が言ったように、人それぞれ考えが違うもので、たとえばある歴史上の人物の評価というものもなかなか定まりません。しかしながら清の学者、章学誠（一七三八―一八〇一）くらい

毀譽褒貶が激しい人物というの少ないのではないかと思います。あるひとは章氏が「天才」だと言い（宮崎市定の評価）、あるひとは「不満を大言でまぎらしていた」だけと言います（増井經夫の評価）。我々の研究班で会読しているのが、その章学誠の名著、『文史通義』です。

研究班では、訳注の作成に注力しているので、人物の評価まで議論してはいませんが、それにしても章学誠の文章のみを読み続け、ひたすらかの人の声に耳を傾けるわけです。二〇一五年の四月以来、大体、月二回のペースで読み進め、二年をかけて、全五巻のうち二巻分を読み終えるところです。これだけ章学誠の書いた文章を読んでもいれば、班員の皆さんにもそれぞれ感ずるところがあると思います。

章学誠が天才か否か、偉いか否かはひとまず措くとして、私が二年の会読を経て感ずることは、章学誠のテキストが実に重層的であるということです。私はそれまで、章学誠の文章をひとりで読んできました。余嘉錫（一八八四—一九五五）という学者が書いた『古書通例』『目錄学発微』という二つの著作を、以前、友人たちとともに翻訳しましたが、その余氏に影響を与えたのが章氏だという理解で、主に目錄学の観点から、個人的に章学誠を読んでいたのです。しかしその

時は、章氏のテキストがここまで重層的であることに是不注意でした。

章学誠が議論の範囲としているのは、上古の時代から清の時代まで、数千年に及ぶ範囲ですから、その議論が重層的であるというのは当然のこととも言えましようが、語の使い方や表現にまで、中国歴代の思想家・歴史家・文学者の刻印が捺されていることは、私にとつて、細かな注釈を試みてはじめて了解されることでした。

しかし調べものをして気づくことよりも、一緒に会読をする班員の指摘によって教えられることの方がはるかに多いのです。たとえば、「不異於聖人之言」（『文史通義』易教下）などという何気ない表現も、朱子『中庸章句』に基づく表現だと班員から教わりました。この研究班には、朱子学を専門とする人が数人いて心強いのです。私は恥ずかしながら朱子学の基礎がしっかりしていないので、そんなことにはまず気づきません。明代思想の専門家が班員に含まれていないのは残念ですが、もしいらつしやれば、明人の言葉遣いが章学誠に影響していることもいろいろと見いだせるものと思います。以上のような意味において、章氏の文章は重層的だというわけです。

しかし何と言っても書名に「文史」の二字が含まれ

ることが端的に示すとおり、この書物は、「文」と「史」とをテーマとしており、この両方面の深い理解が不可欠です。「文」がいま言う文学に相当するのか、そして「史」が史学に相当するのか、同等とは言えないまでもどの程度重なり合うのか、これは大きくかつ重要な問題です。すぐに明確な答えを出すことは不可能ですが、かなり重なりあう部分が大きいのではないかと私は見積もっています。それが誤りでないとする、と、『文史通義』を読むには中国文学の専門家、そして中国史の専門家の協力が不可欠ということになります。さいわいこの研究班には、複数の中国文学・中国史の専門家が参加してくださっています。実に頼もしくありがたいことです。

中国史の理解が必要なことの一例を挙げれば、「墓田隴畝、祠廟宗支」といった墓地や土地や宗族関係の訴訟ごとにつき、「碑碣を履勘し鄙野を扱ばず」（『文史通義』言公中）と章氏は言います。章氏が生きていた時代の裁判の様子を引き合いに出して、古代を語ろうという趣向ですが、どうも私にはよく理解できません。そこで班員の岩井茂樹先生にうかがったところ、詳しく説明していただき、班員もよく納得できました。我々のような古典学や思想史分野の人間には分からないところは、『文史通義』に多々あります。

また章学誠の文章は規格外れなので、文章自体が難しく、それにもましてかなり特異な文学観を持っているので、中国文学の専門家の力は、会読において常に発揮されています。これもありがたいことです。

研究班の開始から二年が経ち、巻一の訳注も完成しました。毎年、一卷分の訳注を公表し続け、全五巻を訳し終えるのは、先の長い話ですが、班員の皆さんの協力を得て、今後とも辛抱強くこの研究班を続けて行くつもりです。

盗掘簡を読む

宮 宅 潔

書道教室に通う娘が、所属する書道会の会誌を毎月持ち帰る。ときどき手にとつてページをめくるのは「競書成績」の欄を見て娘の昇級のぐあいを確かめるためで、かなりのんびりとした上達ぶりにはやきもきさせられるが、中国古代史を専門とする父親の方も、書芸術にはてんで疎いのだから、偉そうなことは言え

ない。小言を呑み込んで他のページも眺めてみると、「臨書課題」のなかに著名な書家の作品とならんで、中国西北辺境で出土した古代木簡の臨模を見つけることがあり、歴史研究の材料として日頃こうした木簡と向き合っている身としては、思わぬところで顔なじみに出会ったような気分になる。

「思わぬところで」と言いつつも、素材で力強い木簡の書が、少なからぬ書道家を魅了していることは十分に承知している。しかし個人的な関心の薄さも手伝って、書道の世界で起こっていることは何やら他人事であるように感じられるのも、また正直なところである。先日、ある書道雑誌を同僚から示され、そこに掲載された「未公開」の「新出土」簡の写真を目にした時も、「思わぬところで」というのが率直な第一印象だった。とはいえ他人事を決め込むわけにはいかない。これは貴重な史料である。本物であるならば。

中国甘肅省から出土したというこの木簡群は、長さ三〇cm超、幅五〜七cmという幅広の簡で、そこに経書の文章が三行にわたって書かれている。これまでの出土例では、手紙や公文書の一部が幅広簡に書かれることはあるが、書籍は例外なく一行書きの細い簡に書写されているので、この点まず異様である。かつ一枚の簡に全文は収まらず、紐で綴じた複数の簡に書かれて

いたはずだが、紐が通った痕跡やそのために空白が残された箇所などは見あたらない。書体も変わっている。縦画を長く伸ばした書体が多用されているものの、これは文書簡に見られる特徴で、書籍簡には登場しない。このあたりで相当やる気が萎えてくるが、もう少し目をこらしてみると、例えば「晉」が当用漢字の「晋」に近い書体で、さらに「犧」が現代中国の簡体字である「牺」と書かれていて、もはや言葉を失った。

偽造簡の問題はかねてから研究者を悩ませてきた。明らかに偽物と分かるものとはともかく、最近はその込んだ贋作も出回っている。個人的に目睹したことがあるのは、一見きれいな戦国時代の楚の簡だった。ただしC14の鑑定では一〜二世紀の本に書かれていて、その間に四〇〇年以上のズレがある。だが現代の木材ではないのも確かで、何らかの理由で測定に誤差が生じたのかもしれない。そう思って慎重に中身を読んでみると、包山楚簡と『国語』の引き写しだった。古墓を盗掘し、手に入れた棺桶などを素材にして木簡を偽造するという手口は、他にも例があるという（胡平生『簡牘の辨偽と流出簡牘の救出について』『出土文献と秦楚文化』第八号）。

新たに発見された木簡・竹簡はいまや観光資源となっており、出土地には博物館が建てられ、レプリカが

売られる。レブリカの作成を通じて会得された古代文字の書写技術が、あらぬ目的に活用されることもあるらしい。そもそも木簡や竹簡は素材が安価で、贋物の作成に元手がかからない。加えて需要も低くないのだから、骨董市場が偽造品であふれかえるのも無理はない。コレクターとして、そのことはよく分かっている。それでも彼らの購買意欲が衰えないのは、そのなかに真品が、つまり本物の盗掘簡が含まれている、一縷の可能性があるからである。

毎年刊行される新史料のうち、研究機関が真品と判定し、公開された盗掘簡の占める割合は確実に増えており、いまや通常の出土簡を圧倒している。昨年四月に始まった研究班「秦代出土文字史料の研究」でも、湖南大学岳麓書院が購入した盗掘簡を読んでいる。大学が購入した簡にも偽作が混じっているご時世だけれども、こと岳麓簡はその内容からして本物の盗掘簡とみて間違いない。またたとえ本物であっても、出土状況についての情報を欠いていることが盗掘簡を扱う際の悩みの種なのだが、岳麓簡は墓からの盗掘品である可能性が高く、その出土地も湖北省一带と推察される。会読の材料とした所以である。

それでもなお、わだかまりは残る。犯罪を助長しているという点では、自分も、珍品を求める好事家も、

たいして変わらないのではないかと。今はともかく目の前の簡に記された文字を追いつ、その史料としての価値を探るとともに、盗掘により失われた価値をも、なるべく冷静に、客観的に論じることが、我々のなすべき事なのだと言ひ聞かせている。

ハンブルク再訪

永田知之

二〇一七年二月一九日、筆者を含む京都大学の教員三名、学術研究支援室（UR A室）と国際交流課の職員各二名はドイツに降り立った。京大はこれより先、ハンブルク大学（UHH）から学術交流協定の締結を求められていた。この拙文が世に出る前に、京大総長臨席の下、ハンブルクで開かれる協定の調印式も終わってしよう。我々の出張は調印と共に開かれるシンポジウムに向けた準備と視察を目的とする。人文科学研究所（人文研）の構成員、特に筆者がその任に当たったのは、人文研がUHHアジア・アフリカ研究所と部局間交流協定を結んでおり、筆者がしばらくの間、UHHに在籍していた、という理由による。

四年ぶりのハンブルクでは、到着翌日の二〇日朝にUHHとの交渉が始まった。京大のメンバーとUHHの担当部門（International Affairs Officials）など関係職員とで全体の会合を持った後、セッションごとにシンポジウム等の段取りを話し合った。筆者の関わ

る分科会の交渉相手は元の上司だったし、他のセッションに関しても協議は順調に進んだ。

ただ、ここに至るまでには、双方の事務部門が折衝を重ねてきたのであって、筆者などは最終段階で交渉に加わったに過ぎない。事前の折衝が無ければ、物理学、法学・経済学、高分子化学、日本学、感染症研究や筆者が関わる写本学など多様な分科会から成るシンポジウムの概略が、無事に決まったとは思えない。両大学の関係各位に、心から敬意を表したい。

それにしてもInternational Affairs Officialsの充実ぶりには、目を見張るものがあつた。その広々とした空間では、多数の職員が主体的に業務を遂行しているように見受けられた。会合で議長席に座するなど交渉を統括したのも、同部門の責任者だった。この点は、事務職員が教員の主導に従う建前を取る日本の大学と大きく異なる。国外の大学に詳しい向きには事新しく感じられまいが、その様子を見るに付け、制約の多い中で交流の実を上げようと努める京大職員には、頭が下がる思いである。専門性の高い事務スタッフに応分の裁量権を認めることを、京大も真剣に考えるべきではないか。

現時点（二〇一七年三月下旬）では六月の調印式とシンポジウムが成功裏に終わり、人文研を含む京大と

UHHとの交流の進展を祈る次第である。ここで擱筆できればよいのだが、規定の字数に達しないため、今少し駄文を続けさせてもらいたい。筆者の旧勤務先、The Centre for the Study of Manuscript CulturesはUHH本部の近隣に位置する。挨拶を兼ねて視察に赴いたが、四年前に十数人いた筆者の同輩は、一人しか残っていなかった。現状は薄々知っていたし、若手が多いので当然ながら流動性は高い。この唯一の元同僚も「来週には北京へ移って、職に就く」とのことで、長話は憚られたから早々に退散した。彼を含めて各地に散った旧同僚の職は、多く任期付のものだろう。若手研究者が安定した地位を得ることの難しさは、洋の東西を問わない。

事務職員諸氏が業務で別の都市に発った翌二日は、教員が個別に視察を続けた。視察の合間の昼時、筆者は元の下宿に足を延ばした。ハンブルクでは嘗て民家の一角に間借りしていたが、家主のV一家は筆者に親身に接してくれた。帰国後も続けていた連絡が、近一・二年は途絶えがちだった。驚かせたい気持ちがあつて、V邸には前触れも無しに出向いた。見慣れた街路沿いの懐かしい家に着いて、玄関の脇を見たところ、そこには知らない名前の表札が掛かっていた……。失望を抱えて午後の仕事を終えた後、ホテルに戻つ

た。同じ街に今も住んでいる保証は無く、また翌二二日には帰途に就くのに、どうすればV家の所在を探せようか？ そう思いつつ諦め悪く検索サイトで調べたところ、臨床心理士のV氏（彼の職業は初めて知った）が勤める「S：通り二九番地」の診療所がヒットした。UHHの紹介で泊まっていたホテルの住所を確かめると、「S：通り三番地」とあつた。双方の住所を見ながら二・三度まばたきした後、筆者は土産物をつかんで目と鼻の先の診療所に向かって走り出した。

一度目はV氏が不在、出直すと今度は診察中なので、待合室で待たせてもらった。この種の場所に足を踏み入れるのは、日本のそれも含めて初めての経験だった。天井が高く、穏やかな色合いの調度で統一された待合室にいますと、診察室が複数あるだけに患者が何人も出入りする様子が目に入った。患者やスタッフが「ハロー」「チユース」と声を掛け合うのは、治療法の一つなのだろうか。妙に明るい患者たちで、筆者などよりよほど健康そうに見えた。一時間ほど後、V氏が診察室から出て来た。失われかけた再会の望みが偶然かなえられて筆者が何とも言えない表情をしていたことは、彼の第一声から察せられる。

「どうぞ落ち着いて、楽にして下さい。ドイツ語か英語、話せますか？」

「いえ、あの……、患者ではありません。もと下宿人です」

飛び込みで診察を求める（ありそうもない話だが）思い詰めた未知の東洋人に見えたらしい。顔をよく見せて、何者かを思い出してもらった後、診察室の中で市内での転居、家族の無事息災（後日V夫人からメールを頂戴した）について聞いてから、診療所を辞去した。セラピーを受けたわけでもないのに、北ドイツの薄暮の中で、心が温かくなったような気がした。

「文献屋」のフィールドワーク

藤井正人

かつて（今もそうかもしれないが）地域研究などでは、現地に出て調査する者と文献資料を分析する者とは、自分や相手のことを「フィールド屋」「文献屋」と呼んで、いい意味で競い合っていたそうである。インド最古の古典文献であるヴェーダを専門とする私は、三十年以上にわたって毎年インドでフィールドワーク

を行っている。「文献屋」がフィールドワークを続けているのである。

留学していた大学の教授に連れられて、はじめてフィールドに入ったときは、特に現地社会を調査する意図もなく、自分が研究している文献の古写本を求めて南インド・ケララ州のヴェーダ伝承者たちの家々をひたすらまわっただけであった。その後、現存するヴェーダ写本の総合的な調査を行うために、より広範囲に多くのヴェーダ伝承者の家系に接するうちに、ケララのバラモンたちの社会そのものが、ヴェーダに基づいて組織化されていて、そのことがヴェーダの伝承を担保してきたことに気づきはじめた。「文献屋」ができるフィールドワークの形が少しずつ明確になってきたのである。その頃に、二人のヴェーダ研究者が現地調査に加わってくれたことは幸運であった。三人による共同研究になったことで、調査の視野が一気に広がった。数年後には、現代インド地域研究の「フィールド屋」が多数集まる南アジア学会で、三人の「文献屋」が、ケララ州のバラモン社会についてのセッションを開くまでになった。

今年も三月に、ケララのヴェーダ伝承について調査してきた。何を調査するかに関して情報源となる資料や記録がほとんどないので、毎回、手探りのように

情報をかき集めて、調査対象を定めている。情報を集めるために私たちが行っていることは、毎年必ず同じヴェーダ伝承家を訪ねて、その家に所蔵されている大量の写本の調査と撮影に時間の多くを費やすことである。写本の調査と撮影は現地調査の重要な目的の一つではあるが、同時にそれを、バラモン社会のネットワークにつながっているその家に長時間滞在して情報を得るための、便利な理由として利用している。写本撮影の合間に、その家の人たちに近隣のようなすやバラモン・コミュニティの動きなどについて気楽に語ってもらうことで、最新の情報やこれまで耳に入らなかった情報を集めるのである。

今回の調査では、数年前にアグニチャヤナと呼ばれる大規模なヴェーダ祭式を挙行した人が、その後も毎日、朝夕の祭火への献供（アグニホートラ）を、新月と満月の日には新満月祭と呼ばれる祭式を続けていると聞き、取材と撮影を行った。近年、ケーララでは大規模なソーマ祭やアグニチャヤナ祭が頻繁に行われ、一種の文化イベントと化しているが、挙行者（祭主）にとつては、それ以上の意味をもっていることがわかった。アグニチャヤナ祭を行った後も祭火献供や新満月祭などを継続していることから、挙行者にとつては、大規模なヴェーダ祭式は、それによって獲得した威光

を保持し続けるべき生涯にわたる威光の創出なのである。

同じく今回、有名なヴェーダ祭式の指導者で学匠家系の人が、アウパーサナと呼ばれる祭火による二種の祭事（毎朝のアウパーサナ・ホーム、新月日と満月日のスターリーパーカ）を行っているという情報を得て、調査に赴いた。アウパーサナ祭火は、大規模なヴェーダ祭式を行うためにあらたに設置するシユラウタ祭火（三祭火からなる）とは異なり、結婚直後に設置する家庭祭火（一祭火）である。ケーララのバラモンの複雑な階層社会には、シユラウタ祭火を用いるヴェーダ祭式に関して、学匠家系（正確には二種の学匠家系の内の一つ）の者は、他人の挙行に対して指導・監督を行うことや、祭官としてかわることはできるが、自らが祭主となって挙行することはできないという原則がある。学匠家系に属するその人がアウパーサナ祭火による祭事を実行していることは、まさにそのことに関係していた。そもそもシユラウタ祭火を設置することとができない彼にとつて、アウパーサナ祭火による二種の祭事は、シユラウタ祭火を用いる前述の祭火献供と新満月祭に相当するものであり、執行日や式次第もそれらにきれいに対応していることがわかった。このこともまた、これまでの調査では見えていなかった事

実である。

現代のケーララでは、ヴェーダはバラモン社会の中で少数の伝承者によって個々に伝承されているので、ヴェーダ伝承全体の実態に関しては、伝承者自身や地元の古老からも信頼できる情報は得にくい。根拠の乏しい説明が本当らしく語られることもある。そのため、ヴェーダ伝承に関するフィールドワークでは、はじめに見聞きしたことは、あくまでも仮の事実として保留にしておく慎重さが必要である。時間をかけて複数の証言を得て検証することによって、事実を確定することが求められる点で、文献学の方法に通じるところが多い。「文献屋」によるフィールドワークには、テキスト（情報）を批判的に検討した上で正確な読みと意味（事実）を確定するという文献学ならではの手法が適用できるところに、もしかすれば最大の強みや利点があるのかもしれない。

オデユツセウスの教訓

藤井俊之

人文研での研究は、内側に向かうことで外に出てしまふという不思議な構造をもっている。そうであれば、外から訪れるのとは違い、その内側にいることは常に外に身を置く経験だと言える。建物の内側に入ること、外へ出てしまふというコミカルな現象、このメビウスの環は、では、外に出れば内に入るという逆転を許すだろうか。確かに、うちに帰るには外に出なければならぬわけだが、ここで言いたいのはそういうことではない。精神とでも呼ばれるものの帰郷先が、この場合には問題となるからだ。内と外の結合は、知性の希求する全体性の出現の理想像でもあるだろうが、そこに現れる居心地の悪さは、しかし一体どこに淵源するのだろうか。

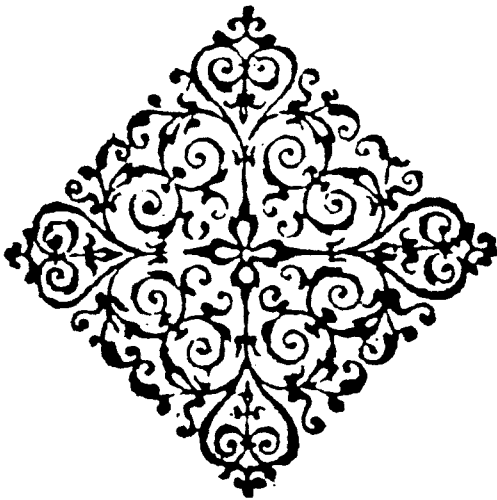
こうした落ち着かない気持ち、第二次大戦中の亡命知識人にならって、オデユツセウスの物語にたとえ

することもできるだろう。すべてを求める諸力の拮抗に追われた世界の果てアメリカで執筆された著作（『啓蒙の弁証法』）の一章をその分析にあてたアドルノとホルクハイマーは、不可能な一貫性を追求めて具体的な細部を抹消する知性の本性（同一化）にその原因を求めた。またその際には、ホメロスの主人公が、帰郷の後には自分の留守中に妻に迫った求婚者たちを皆殺しにしたことも忘れられてはいなかったはずだ。かくして、航海の途上に現れる怪物たちを知性の働きによって滅ぼした英雄の姿を、ヨーロッパ的理性のアレゴリーとする二人の亡命知識人にとって、文明の進歩は人間の情念を抑圧する道徳のそれと手を結ぶものとなる。すべてを自分のものにしようとする妄執にとりつかれた人間が、自らの建造物の崩壊を恐れるあまり、アモルフな衝動の噴出を押さえ込まねばならないという悲劇が、この場合には啓蒙の挫折として描き出されたのだと言えよう。ここから分かるのは、理性と欲望のせめぎ合いなど、旅の途上の一コマとしては勇ましい冒険譚になるが、その辿り着く先には理性的暴力という撞着語法的な自家中毒の惨状が待ち受けているということだ。そこには、自らの姿を鏡に映しては自画自賛する理性のナルシズムがある。では、これとは別の行き方はあるだろうか。

アメリカから目を転じて、こうした経験を日本に探してみれば、カリフォルニアのユダヤ人たちとはほぼ同世代、一八九四年に生まれた人物として、文明社会を逸脱する人間を描き続けた怪奇作家江戸川乱歩が挙げられる。その短編に、鏡像への嗜癖を持ったおとこが己の欲求を満たそうとして、完璧な弧に磨き上げた鏡を張り合わせて球体を作り上げ、故意か事故かは定かでない事情によって、その中に一晚閉じ込められた挙句に発狂して死を迎えるという話がある（『鏡地獄』）。全体を見渡そうとする知への欲望を、文字通り可視化したこの作品は、鏡の内側に入ることでの自らの視覚を一瞬のうちに全体へと拡大された人間の破滅を描いたという点で、この場合は情欲に支配された理性の末路を示していると言える。

もう一つ、最後はアルゼンチンから例をとれば、同じく世紀末の一八九九年生まれの作家Ｊ・Ｌ・ボルヘスが、世界のすべてを同時的に映し出す奇妙な鏡の球体の話を書いている（『アレフ』）。この掌編が面白いのは、この謎の鏡の存在によって一個人には過大な世界のすべてを知ってしまった語り手に見出される救いの道が、再びその細部が記憶からこぼれおちていくという漸進的な忘却作用であったというところだ。アドルノたちによって語られるのが理性の監獄であり、乱

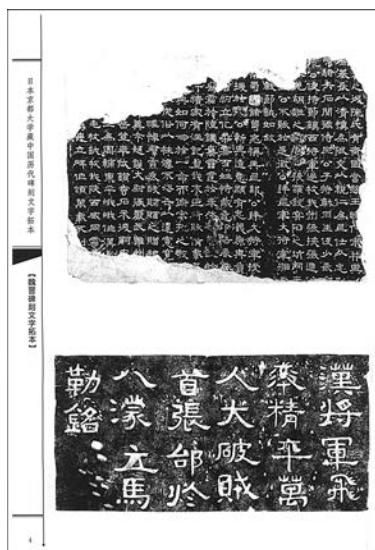
歩の描いたのが情欲の地獄であつたとすれば、ボルヘスに示されるそこからの脱出口は忘却による自然への崩壊現象であつたと言える。全体を求めずにはいられない知性の営みも、乱歩が冷笑的なスタイルで描き出した鏡地獄ではなく、ボルヘスのユーモアに満ちたアレフをこそ範とすべきなのかもしれない。しかも、その際には、全体の把握を詐称するのではなく、オデュッセウスの教訓に学んであくまで外の世界を示すことを忘れることもなしに、である。世紀転換期に生まれた彼らの知性批判は、全体を求めた一九世紀の遺産でもあるだろう。自らの首を絞めるこの知性の円環がほどこけるところ、それを目指すこともまた現代の知性のなすべきところである。



『日本京都大学蔵中国歴代碑刻文字拓本』に関して

安岡孝一

中国および日本国内のいくつかのWWWサイトにおいて、『日本京都大学蔵中国歴代碑刻文字拓本』（全十巻）という書籍の注文販売がおこなわれているのを見つけた。ツテを辿って、第一巻の書影の一部（左図）を手に入れたのだが、どうやら、拓本文字データベース（附属東アジア人文情報学研究中心が運用）の



拓本画像を、流用された可能性が極めて高い。この件に関して、以下に私見を記す。

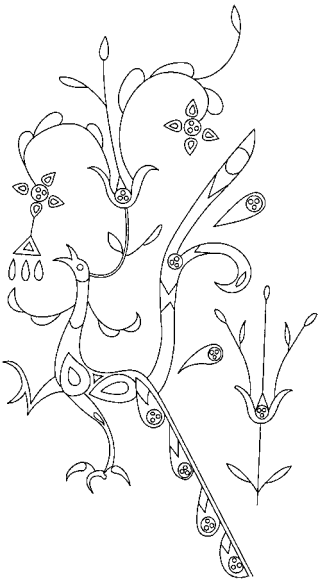
まず、著作権法違反の可能性だが、結論から言うと、この書籍に対して著作権法違反を問うのは、かなり難しい。拓本文字データベースは、単純化して言えば、元の石碑↓拓本↓写真↓デジタル画像↓データベース、という流れで構築されている。このうち、デジタル画像の部分までは、二次元のものから二次元のものへの変換であり、元の石碑の著作権（とつこの昔に消滅）がそのまま及ぶため、新たな著作権は発生しない。一方、デジタル画像↓データベース、の部分には、編集著作権が新たに発生しているが、この書籍の各拓本画像には、拓本文字データベースでの管理番号もタイトルすら表記されていない。文字の切り出し画像も釈文も掲載されておらず、編集著作権の侵害を主張するのは、極めて難しいように思える。

次に、優良誤認にもとづく販売差止請求だが、これは、当該書籍が「日本京都大学」を冠していることから、京都大学としては、国内の各書店に対し、販売差止の仮処分を請求することは可能だろう。また、京都大学が抗議声明を出すことも、もちろん可能だと思う。しかし、それはあくまで京都大学がおこなう場合である。人文科学研究所が同様のことをおこなうのは、人

文科学研究所の名が出ていない以上、現時点では難しいと思う。少なくとも当該書籍を一セット手に入れた上で、文科学研究所が所蔵する拓本との突合をおこない、その結果にもとづいて、仮処分請求なり抗議声明なりをおこなうべきである。でも、こんな本に金を出すのは嫌だ。

ただし、京都大学の各構成員が、個人的に国内外の各書店に「注意喚起」するのは自由だし、それは「学問の自由を守る」射程に入り得ると思う。そんなわけで、私自身も個人的にやってみた。よければ、左記のWWWページも見てもいい。

<https://srad.jp/~yasuoka/journal/607704/>



書いたもの一覧 二〇一六年四月～二〇一七年三月（氏名五十音順） ●は単行本

浅原 達郎

武庚祿父奇談

日古 二六号 四月

繁年の構図

日古 二七号 九月

池田 さなえ

明治二四年の皇室会計法制定―「御料部会計ノ部」の全章修

正―

日本歴史 八一六号 五月

近現代史部会 明治期皇室の土地所有に関する一考察―北海

道御料林除却一件を事例として―

日本史研究 六四八号 八月

近代皇室の土地所有に関する一考察―北海道御料地除却一件

を事例として―

史学雑誌 一二五編九号 九月

書評 内山一幸著『明治期の旧藩主家と社会―華士族と地方

の近代化―』

年報近現代史研究 九号 三月

石井 美保

響きあう家族のかたち―南インドのフィールド・ライフ 椎

野若菜・的場澄人編『女も男もフィールドへ（FENICS

100万人のフィールドワーカーシリーズ12）』

古今書院 六月

インドにおける血液、贈与、共同体―有徴化と匿名化のはざ

まで 坂野徹・竹沢泰子編『人種神話を解体する2 科学
と社会の知』 東京大学出版会 十一月

Attuning to the webs of en: Ontography, Japanese spirit
worlds, and the "tact" of Minakata Kumagusu. (共著)

Hau: Journal of Ethnographic Theory 6(2) 十一月

●環世界の人類学―南インドにおける野生・近代・神靈祭祀

京都大学学術出版会 二月

石川 禎浩

「毛沢東伝略」作者考―兼論莫斯科出版の幾種早期毛沢東伝

記

党的文献 二期 四月

『紅星照耀中国』各国版本考略（上）

中共党史研究 五期 五月

『紅星照耀中国』各国版本考略（下）

中共党史研究 六期 六月

把視野放在国際、才能回到歴史的現場

文匯報 七月一日

●陳独秀文集 第二卷（共編訳）

平凡社 十月

●赤い星は如何にして昇ったか

臨川書店 十一月

刊行にあたって 貴志俊彦等編『京都大学人文科学研究所蔵

華北交通写真真資料集成』

国書刊行会 十一月

稲葉 穰

トウルシユカーインドのテュルク 小松久男編『テュルクを知るための61章』 明石書店 八月

Between Zābulistān and Gūzgān: A Study on the Early Islamic History of Afghanistan. *Journal of Inner Asian Art and Archaeology* 7 三月

稲本 泰生

雲岡石窟の仏教説話浮彫―本生・因縁図を中心に

國華 一四五一号 九月

岩城 卓二

武家と庶民のはざまで生きる―妻鹿淳子『武家に嫁いだ女性の手紙：貧乏旗本の江戸暮らし』に接して

女性史学 二六号 八月

●たごる調べる 尼崎の歴史 上・下巻(共著) 尼崎市 十月

●本興寺文書 第四巻(共編) 清文堂出版 十一月

ウィッテルン・クリスティアン

禪におけるルールと反則について 天野文雄編『禪からみた日本中世の文化と社会』 ぺりかん社 七月

Public and Private Views of Texts in Digital Editions-The Case of the Kanseki Repository. *Digital Humanities* 2016 七月

王寺 賢太

共同討議 いま、現代思想と政治を問い直す 市田良彦・王寺賢太編『現代思想と政治』合評会の記録 週刊読書人 四月二二日号

いとも厳密で継続的な検討―ベールと「迷える良心の権利」 仏語仏文学研究(東京大学仏語仏文研究会編) 四九号 十月

●京都大学人文科学研究所蔵 中川文庫貴重書目録(編著) 京都大学人文科学研究所 十一月

●徹底討論 市田良彦・王寺賢太編『現代思想と政治』@京大 人文研(共著 kindle版) 週刊読書人 十二月

京大人文研「中川文庫」開設のお知らせ

日本18世紀学会ニュース 二月

大浦 康介

Fiction and Fictionality in Japanese Culture: *Shishōsetsu* (I-Novel) and "Otaku" Culture. *Annals of "Dimitrie Cantemir" Christian University* 16(1), "Dimitrie Cantemir" Christian University, Faculty of Foreign Languages and Literature. 八月

書評 自意識のドラマ エドゥアール・デュジャルダン『妄想と強迫―フランス世紀末短篇集』 図書新聞 八月

●対面的―(見つめ合う)の人間学 筑摩書房 十二月

谷崎と〈本当らしめ〉 五味渕典嗣・日高佳紀編『谷崎潤一郎讀本』 翰林書房 十二月

岡田 曉生

楽友協会と宮廷歌劇場 池田祐子編『ウィーン 総合芸術に宿る夢（西洋近代の都市と芸術4）』 竹林舎 七月

岡村 秀典

岡村秀典教授訪談録（共著） 南方文物 二期 六月
●監訳 霍宏偉・史家珍主編『洛陽銅鏡』 科学出版社東京 七月

雲岡石窟における大型窟の編年 國華 一四五—一五九号 九月

紀年銘をもつ神獸鏡の新例 史林 九九卷五号 九月

雲岡中期における仏教図像の変容 東方学報 九一冊 十二月

樋口隆康先生と金文研究会 泉屋博古館紀要 三三二卷 十二月

小川 佐和子

「命かけて只一度」——《会議は踊る Der Kongress tunzi》をめぐる映画とオペレッタの演出 季刊 ichiko 一三二号 七月

書評 映画的思考の宇宙への道行 山本喜久男著（奥村賢・

佐崎順昭編）『日本映画におけるテキスト連関——比較映画史研究』 演劇映像 五八号 三月

小野 容照

『アンのかぐろ』を読む——村岡花子と植民地朝鮮

人文 六三三号 六月

日本における初期の朝鮮人社会主義運動——朝鮮独立運動史と在日朝鮮人史の狭間で チョンナム大学校在日コリアン研究所編『在日コリアン運動と抵抗的アイデンティティー』（韓国語） ソウル・ソニン 七月

●朝鮮半島の野球用語 京都大学新聞 十二月一六日
●帝国日本と朝鮮野球——憧憬とナショナリズムの隘路 中央公論新社 一月

朝鮮独立運動とソヴィエト政府、コミンテルン 麻田雅文編『ソ連と東アジアの国際政治 1919-1941』 みすず書房 二月

籠谷 直人

●メガシティ3 歴史に刻印されたメガシティ（共編） 東京大学出版会 八月

菊地 暁

近代仏教の写真集 大谷栄一他編『近代仏教スタディーズ』 法蔵館 四月

「華北交通写真」出版と写真展開催によせて——加藤新吉、水野清一、梅原龍三郎のことども—— 慶応義塾大学出版会HP 十一月

華北交通の民俗写真 貴志俊彦・白山真理編『京都大学人文科学研究所蔵 華北交通写真資料集成』 国書刊行会 十一月

むすびにかえて―加藤新吉と京大人文研― 貴志俊彦・白山
真理編『京都大学人文科学研究所蔵 華北交通写真資料
集成』 国書刊行会 十一月

●ライフヒストリーレポート選二〇一六(編著)

「ふくちのち」をきく その1〜3 京都大学民俗学研究会 十二月
資料館「ふくちのち」HP 福岡町立図書館・歴史 三月

古 勝 隆 一

孟子／老子／論語 『名著で読む世界史120』

山川出版社 十二月

目録学―俯瞰の楽しみ

『目録学に親しむ』 研文出版 三月

『文史通義』内篇一譯注

東方学報京都 九一冊 三月

小 関 隆

絶対平和主義と有和政策…クリフォード・アレンの「建設的
平和主義」 志村真幸編『異端者たちのイギリス』

共和国 四月

2015年の歴史学界…回顧と展望(ヨーロッパ現代一般)

史学雑誌 一二五編五号 五月

書評 小野塚知二編『第一次世界大戦開戦原因の再検討』

『国際分業と民衆心理』

西洋史学 二六一号 六月

『至上の時』の神話…イギリスの第二次世界大戦経験

成洋編『イギリスの歴史を知るための50章』

明石書店 十二月

書評 荒木映子『ナイチンゲールの末裔たち…(看護) から
読みなおす第一次世界大戦』

英文学研究 九三卷 十二月

瀬戸口 明 久

電信と電波で一つになる世界 藤原辰史編『第一次世界大戦
を考える』 共和国 四月

生命としての科学／機械としての科学―科学の意味をめぐる
問い 金森修編『昭和後期の科学思想史』

コメント 科学の越境再考 科学史研究 二七九号 十月

勁草書房 六月

高 井 たかね

●監修・翻訳 中国国家文物鑑定委員会編纂『中国文化財図鑑
第五卷家具』 科学出版社東京・ゆまに書房 十二月

明清家具―その様式と展開、および品種について 中国国家
文物鑑定委員会編纂『中国文化財図鑑 第五卷家具』

科学出版社東京・ゆまに書房 十二月

陶湘の復刻本とその「愛書」について 『合同シンポジウム
2015 東方文化研究の記憶と遺産』(予稿集) 一月

高 木 博 志

修学旅行と伊勢 ジョン・ブリー編『変容する聖地伊勢』

思文閣出版 五月

●新修英木市史 第三卷 通史三(共編)

英木市 七月

欧州から見た京都の歴史 京都民報 九月一八日

近代皇室における仏教信仰―神仏分離後の泉涌寺を通して

祭祀史料研究会編『祭祀研究と日本文化』

塙書房 十二月

●世界遺産と天皇陵古墳を問う (共編) 思文閣出版 一月

伊勢神宮への修学旅行 瑞垣 神宮司庁 二二六号 一月

近現代の茨木市域と史料調査 『いばらきの過去・今・未来

―市史編さんからみえてきたもの』

茨木市史編さん委員会 一月

解題 (東利之家文書) 茨木キリシタン遺物発見をめぐつて

新修茨木市史年報 一五号 三月

高 階 絵里加

恤兵美術展覧会 藤原辰史編『第一次世界大戦を考える』

共和国 四月

夢二再訪 人文 六三号 六月

展覧会 日本経済新聞(夕刊) 四月一二日、五月一八日、

六月二二日、七月二六日、八月二四日、九月三〇日、十月

一七日、十一月一六日、十二月二日、一月六日

竹 沢 泰 子

●Trans-Pacific Japanese American Studies: Conversations

on Race and Racializations (co-edited). University of

Hawaii Press. 九月

日系アメリカ人の強制収容と補償運動 多民族共生人権教育

センター編『メーレック・ブックレット』VOL.6

九月

●人種神話を解体する3 「血」の政治学を越えて (共編) 東

京大学出版会 九月

序章 混血神話の解体と自分らしく生きる権利 川島浩平・

竹沢泰子編『人種神話を解体する3 「血」の政治学を越

えて』 東京大学出版会 九月

第8章 ミックスレイス日系人アーティストの作品と語り―

人種カテゴリーをめぐる解釈と表現の戦略 川島浩平・竹沢

泰子編『人種神話を解体する3 「血」の政治学を越えて』

東京大学出版会 九月

●人種神話を解体する1 可視性と不可視性のはざま (共

編) 東京大学出版会 十月

序章 差異の可視性／不可視性 (共著) 斉藤綾子・竹沢泰

子編『人種神話を解体する1 可視性と不可視性のはざま

で』 東京大学出版会 十月

試論 差異と差別の(不)可視化をめぐつて 斉藤綾子・竹

沢泰子編『人種神話を解体する1 可視性と不可視性のは

ざま』 東京大学出版会 十月

●人種神話を解体する2 科学と社会の知 (共編)

東京大学出版会 十一月

第10章 日本におけるゲノム研究と集団の表象―座談会 (共

著) 坂野徹・竹沢泰子編『人種神話を解体する2 科学

と社会の知』 東京大学出版会 十一月

人文研での共同研究と科研費 私と科研費 No.96 二月

Kakenhi and my Collaborative Research Work at the Institute for Research in Humanities, *Kakenhi Essay Series* 96
二月

汲古書院 十二月

生氣と天医—『医心方』の方位学

医道の日本 八八一号 二月

竹岡友仙の医事活動—近代京都の医史学(一)

医道の日本 八八二号 三月

武田 時 昌

アンチ傷寒論者の挑戦—温病学の問題圏(一)

医道の日本 八七一号 四月

三焦弁証と舌診—温病学の問題圏(二)

医道の日本 八七二号 五月

長寿遺伝子とミトコンドリア—アンチエイジング療法

医道の日本 八七三号 六月

長生の煉丹術

化学史研究 四三卷二号 六月

座談会 古医書を語る

医道の日本 八七四号 七月

鍼灸を存続させた明治の先覚者

医道の日本 八七四号 七月

噂の女医のカルテ—談允賢『女医雜言』を読む

医道の日本 八七五号 八月

『七十一番職人歌合』に描かれた医師

医道の日本 八七六号 九月

モンゴル伝統医療の特異点

医道の日本 八七七号 十月

五行六氣の数理と医術—四時循環のサイエンス—

漢方鍼医 三九号 十二月

六不治と四難—中國醫學パラダイムの術數學的考察 池田知久・水口拓壽編『中國傳統社會における術數と思想』

田 中 雅 一

◎Contact Zone (コンタクト・ゾーン) 八号

コメント 第一回公開合評会 京都大学人間・環境学研究所 藤野陽平『台湾における民衆

キリスト教の人類学』(二〇一三年、風響社)『基幹研究

「人類学のミクロ・マクロ系連関」二〇一五年度公開セミナー：第一回、公開合評会：第一回』

聖職者の禁欲は今昔？ 今流行りの教義は性の解放

だ！ 東京外大アジア・アフリカ研究所 三

ヒンドゥーの供犠とその残滓—宗教的性格を探索する

サイゾー 七月号 六月

宗教は女性を抑圧してきたのか？ 三大宗教の女性観とその

功罪 宗教研究 三八六号 九月

秘された黙示録のシンボル『君の名は。』は宗教学的に秀作

か？ サイゾー 十一月号 十月

討議 性という謎から霊長類をまなぐず (山極壽一との対

談) 現代思想 特集 霊長類学の最新線

サイゾー 十二月号 十一月

十二月号 十一月

軍事環境問題の文化人類学——在沖・米海兵隊普天間航空基地
周辺の聞き取り調査から

社会人類学年報 四二号 十二月

●フェティシズム研究3 侵犯する身体

序章 侵犯する身体・切断するまなざし 田中雅一編『フェ
ティシズム研究3 侵犯する身体』

京都大学学術出版会 三月

ランジェリー幻想 田中雅一編『フェティシズム研究3 侵
犯する身体』

京都大学学術出版会 三月

田中 祐理子

臨界・生成・われわれの知

現代思想(六月臨時増刊号) 四四卷十一号 五月

新刊紹介 金森修『科学思想史の哲学』REPPRE 二七号

表象文化論学会 六月

●翻訳 グザヴィエ・ロート『カンギレムと経験の統一性 判
断することと行動すること 一九二六—一九三九年』

法政大学出版局 二月

立木 康介

コラム ハイデガーとラカン 秋富克哉他編『続・ハイデガ
ー読本』 法政大学出版会 四月

解説 精神分析とデリダーコンフロンタシオンから三部会へ
ジャック・デリダ著、西宮かおり訳『精神分析のときど

い』

フランス精神分析の分派と訓練制度 精神療法

岩波書店 五月

精神分析における原因と対象 実存思想論集 31 六月

応用精神分析と反哲学—医学、哲学と精神分析 哲学の探究

空想詩人、のち革命家—サン・ジュストの『オルガン』 四三号 六月

精神分析の実践と思想 石原孝二他編『精神医学の科学と哲

学』(『精神医学の哲学』一) 人文 六三号 六月

ラカンと女たち 第一回 序—(精神分析的に) 女性的なる
もののほうへ 東京大学出版会 八月

翻訳 ピエール・ブリュノ『欲望、幻想、法』 三田文学 一二六号 八月

翻訳 マリリア・エゼンスタン『ラカンにおける逆転移—い

くつかの開かれた問い』(抄訳) ジャック・ラカン研究 一三三 九月

ラカンと女たち 第二回 序(其二)—男と女とに神は彼ら
を創られた 三田文学 一二七号 十一月

母超自我のアーケ—車谷長吉「抜髪」に寄せて 三田文学 一二七号 十一月

座談会 ラカンの「盗まれた手紙」のセミネールをめぐつ

て」(若森栄樹、笠井潔、巽孝之、原和之の各氏と)

ジャック・ラカン研究 一四号 十二月

ラカンと女たち 第三回 序(其三)—女Ⅱファルス

三田文学 一二八号 二月

土口 史記

春秋・史記・漢書 池田嘉郎・上野慎也・村上衛・森本一夫

編『名著で読む世界史120』 山川出版社 十一月

書類仕事の絶望的な歴史基盤 京大新聞 五月一日

中西 竜也

Chinese Muslims and Islamic Reformism during the Modern Period. Ma Haiyun et al. (eds.) *Zhenghe Forum*

Connecting China and the Muslim World, Institute of

China Studies, University of Malaya. 四月

中国イスラームの研究動向 中国史学 二六卷 十月

アル・マクサドゥル・アクサー(遥かなる目的地)

書評 奈良雅史『現代中国の(イスラーム運動)——生きにくさを生さる回族の民族誌』 京都大学白眉センターだより 一二号 十二月

イスラーム世界研究 十卷 三月

馬徳新とイブン・アラビーの来世論——九世紀中国ムスリムの思想変相 西南アジア研究 八六号 三月

デイーンが「教」になるとき——前近代の中国ムスリムにおける「宗教」と「共同体」 藤井淳編『古典解釈の東アジア的展開——宗教文献を中心として』

イスラームと漢語の邂逅——「回回」の変容 和田郁子・小石

京都大学人文科学研究所 三月

かつら編『他者との邂逅は何をもたらすのか——「異文化接触」を再考する』

昭和堂 三月

永田 知之

中国文学の黎明 詩経／中国的ユートピア 桃花源記 陶淵明／中国最古のアンソロジー 文選 昭明太子／中国古典詩の最高峰 杜甫／東アジアで最も読まれた詩集 白氏文集 白居易／遥かなるインドへの道 大唐西域記 玄奘

池田嘉郎・上野慎也・村上衛・森本一夫編『名著で読む世界史120』 山川出版社 十一月

目録学の総決算——『四庫全書』をめぐる—— 京大人文研漢籍セミナー6『目録学に親しむ 漢籍を知る手引き』 研文出版 三月

藤井 俊之

◎啓蒙と神話——アドルノにおける人間性の形象 航思社 三月

進歩——ヒアトウスをめぐる問いかけ 思想 一一一六 三月

藤井 律之

続・朱字のミステリー 人文 六三三号 六月

河川解説書の枠を超えた宝の地図——水経注 池田嘉郎・上野

慎也・村上衛・森本一夫編『名著で読む世界史120』 山川出版社 十二月

藤 井 正 人

Manuscripts of the Jaiminiya Samaveda Traced and Photographed in 2002-2006. Asko PARPOLA et al. (eds.) *Vedic Investigations. Papers of the 12th World Sanskrit Conference 1. Delhi.*

藤 原 辰 史

人類の耐久性―チャベックから考える (中)

現代思想 四四卷九号 四月
どんな絵本を読んできた? ピーター・シス『三つの金の鍵』

「ひろば」という拠点―言葉を孤立させてはならない
三〇卷三四号 四月

遺伝子組み換え・農村 杉村昌昭・堺穀・村澤真保呂編『既成概念をぶち壊せ!』 晃洋書房 六月

対談 発酵食から考える新しい〈エコロジー〉 小泉武夫×藤原辰史 現代思想 四四卷一七号 六月

2016年上半期読書アンケート 図書新聞 七月二三日
食は教育の課題なのか―食育基本法をめぐる考察 佐藤卓己編『岩波講座現代 学習する社会の明日』

人類の耐久性―チャベックから考える (下) 1 岩波書店 七月
現代思想 四四卷一三三号 七月

人類の耐久性―チャベックから考える (下) 2 現代思想 四四卷一五号 八月
現代思想 四四卷一五号 八月

インタビュー 京大人間図鑑

KU Research web site 一一号 九月

インタビュー 市民とつながり 海を越える 言葉の力

全国革新懇ニュース 三八三三三 十月

『蝦夷地別件』から逃げられない 静脩 五三卷三三三 十月

緑色論―孤食と共食のあいだ ちやぶ台 二二号 十月

アンケート 私にとつての黒田喜夫

季刊びーぐる 三三三三 十月

対談 科学のスケールダウンと大学の未来 池内了×藤原辰史 現代思想 四四卷二二二号 十一月

2016年下半期読書アンケート 図書新聞 十二月二四日

学生食堂の使い方 文藝春秋 九四卷一七号 十二月

屑拾いのマリア (1) 現代思想 四五卷一七号 一月

都市における「緑食の空間」とはどのようなものですか?

10+1 Web site 一月

対談 藤原辰史×高橋博之 食べることは生きること 前編

これまで日本人を最も飢えから救った食べ物!? そのスゴさ

を見直す さつまいもの胸焼けとぬくもり

現代ビジネス (web site) 一月

今年の執筆予定 出版ニュース 二四三三三 一月

対談 対抗するテクノロジーの発明 篠原雅武編『現代思想の転換2017』

屑拾いのマリア (2) 人文書院 一月

融合する学問としての農業経済学 現代思想 四五卷三三三 二月

学術の動向 二二巻二号 二月

対談 藤原辰史×高橋博之 食へることは生きること 後編

東北食べる通信 二月

数学者のノート 京都大学新聞 二月一六日

僕らの犯した過ちは、僕らが収束し、償わなければ 岩波書

店編集部編『3.11を心に刻んで2017』 岩波書店 三月

屑拾いのマリヤ(3) 現代思想 四五巻六号 三月

船山 徹

アジアのことをアジアの外で教えて 人文 六三号 六月

仏典漢訳史要略『仏教的東伝与中国化』 法鼓文化 八月

『大方便仏報恩経』編纂所用引的漢訳経典 方廣鋤(主編)

『仏教文献研究』二 八月

『梵網経』の写本・木版残存状況に基づく新たな校本の形式

Abhinavapitaka「アヴィナヴァトリピタカ」ニユーズ

レター 三 十二月

●東アジア仏教の生活規則『梵網経』—最古の形と発展の歴史

臨川書店 三月

ホルカ・イリナ

Romania and Japan: Real and Imaginary Encounters at

the Turn of the 20th Century. *Analele Facultății de*

Limbi și Literaturi Străine 2016(2), "Dimitrie Cantemir"

Christian University (Bucharest, Romania) 六月

イン・ザ・コンタクトゾーン 人文 六三号 六月

Shimazaki Tōson's *Shinsei* [New Life]: Shaping Self and

Other through Letters. *ZINBUN* 47 三月

宮 紀子

古今東西の『知』の統合…ラシード・アッディーン『集史』

／東西文化の邂逅…李志常『長春真人西遊記』／コロンブ

スをも魅了した東方の驚異…マルコ・ポーロ『世界の記

述』／諸譚の旋律…関漢卿ほか『元曲』／チンギス・カン

讚歌—モンゴル版『古事記』…『元朝秘史』／中国史入門の

ベストセラー…曾先之『十八史略』 池田嘉郎ほか編『名

著で読む世界史120』 山川出版社 十二月

『元典章』が語るフレグ・ウルの重大事変

東方学報 九一冊 十二月

虫眼鏡でアガサ・クリステイを覗いたら

図書 八一七 三月

宮 宅 潔

秦代遷陵県志初稿—里耶秦簡より見た秦の占領支配と駐屯軍

書評 中国簡牘学研究の道標—榎山明『秦漢出土文字史料の

研究』 創文 二二 七月

里耶秦簡「訊敬」簡冊識小 簡帛網 十一月一六日

書評 角谷常子編『東アジア木簡字のために』

日本秦漢史研究 一七号 十一月

荀子・孫子 池田嘉郎等編『名著で読む世界史120』

山川出版社 十二月

村上 衛

究極の小さな政府

国際貿易 二二四八号 四月

伝統的超格差社会

国際貿易 二二五二号 五月

前近代中国の経済規模

国際貿易 二二五六号 六月

『官場現形記』を読む―清末中国「腐敗」官僚の世界

人文 六三三号 六月

中国に「雇われた」英海軍

国際貿易 二二六〇号 七月

書かれない真実

国際貿易 二二六四号 八月

難波する夷狄

国際貿易 二二六八号 九月

●近現代中国における社会経済制度の再編 京都大学人文科学

研究所附属現代中国センター

九月

清末天津の羊毛貿易と通過貿易 村上衛編『近現代中国にお

ける社会経済制度の再編』京都大学人文科学研究所附属

現代中国センター 九月

「大分岐」を越えて―K・ボメラントの議論をめぐる

歴史学研究 九九四号 十月

中国系「イギリス人」

国際貿易 二二七二号 十月

書評 濱下武志著『華僑・華人と中華網―移民・交易・送金

ネットワークの構造と展開』

華僑華人研究 一三三三号 十一月

中国固有の経済発展

国際貿易 二二七六号 十一月

●名著で読む世界史120 (共編)

山川出版社 十二月

The Rise and Fall of the Chinese Pirates: From Initiators

to Obstructors of Maritime Trade, 1500-1800. Christian Buchet and Gérard Le Bouédec (eds.) *The Sea in History: The Early Modern World*. Woodbridge: Boydell Press. 二月

清末西江の「海賊」―「緝捕權」問題と貿易・航運

史林 一〇〇巻一号 三月

目黒 杏子

二〇一五年の歴史学界―回顧と展望―東アジア(中国―戦国・秦漢) 史学雑誌 一二五編五号 五月

守岡 知彦

CHISEによる漢字字体のデジタル記述―漢字字体規範史データベースを例として― 日本語学会二〇一六年度春季大会予稿集 五月

CHISE-wikiにおけるHNGカード画像利用の試み 情処研 七月

報 Vol.2016-CH-111, No.4 CHISEによるHNGデータ収録の試み 石塚晴通監修/高 七月

田智和・馬場基・横山詔一編『漢字字体史研究 二』 勉誠出版 十一月

漢字構造記述再考 東洋学へのコンピュータ利用 第28回研究セミナ― 三月

森 川 裕 貴

二〇一五年の歴史学界―回顧と展望―東アジア(中国―近

代)

史学雑誌 一二五編五号 五月

書評 Shakhur Rahav, *The Rise of Political Intellectuals*

in Modern China: May Fourth Societies and the Roots

of Mass-Party Politics. 中国—社会と文化 三一号 七月

書評 今後の梁啓超研究の前提となる一冊 狭間直樹「梁啓

超 東アジア文明史の転換」 東方 四二九号 十一月

煩悶青年からその「良師益友」へ—『学生雑誌』における楊

賢江 東方学報 九一冊 十二月

●政論家的矜持—章士釗、張東蓀政治思想研究(袁広泉訳)

社会科学文献出版社 三月

In Pursuit of Peace: Zhou Gengsheng's Internationalism

after the World Wars. ZINBUN 47 三月

森本 淳生

翻訳 アンドレ・ジッド、ピエール・ルイス、ポール・ヴァ

レリー『三声書簡 一八八八—一八九〇』(共訳)

水声社 五月

序—文学研究と歴史記述研究の対話のために 文芸事象の歴

史研究会編『GRITHL 文学の使い方をめぐる日仏の対

話』 吉田書店 二月

矢木 毅

朝鮮時代の有旨書状について

朝鮮学報 二四一 十月

●韓国の世界遺産 宗廟

臨川書店 十一月

安岡 孝一

人名用漢字の新字旧字…「梅」と「梅」と「楳」

三省堂ワールドワイズ・ウェブ 四月七日

タイプライター博物館訪問記…菊武学園タイプライター博物

館

三省堂ワールドワイズ・ウェブ 四月二日、二八日、五月

一九日、六月二日、一六日、三〇日、七月一四日、二八日、

一月一九日、二月二日

人名用漢字の新字旧字…「坂」と「阪」

三省堂ワールドワイズ・ウェブ 四月二日

人名用漢字の新字旧字…「絃」と「弦」

三省堂ワールドワイズ・ウェブ 五月二日

人名用漢字の新字旧字…「法」と「灋」

三省堂ワールドワイズ・ウェブ 五月二六日

人名用漢字の新字旧字…「体」と「體」

三省堂ワールドワイズ・ウェブ 六月九日

人名用漢字の新字旧字…「回」と「回」

三省堂ワールドワイズ・ウェブ 六月二三日

人名用漢字の新字旧字…「綫」と「線」

三省堂ワールドワイズ・ウェブ 七月七日

人名用漢字の新字旧字…「産」と「産」

三省堂ワールドワイズ・ウェブ 七月二日

人名用漢字の新字旧字…「彦」と「彦」

三省堂ワールドワイズ・ウェブ 八月四日

タイプライター博物館訪問記…伊藤事務機タイプライター資

料館

三省堂ワードワイズ・ウェブ 八月一日、十月二十日、十一月三日、一七日、十二月一日、一五日

人名用漢字の新字旧字…韓国の人名用漢字は違憲か合憲か

三省堂ワードワイズ・ウェブ 八月二五日、九月一日、八日、一五日、二三日、二九日、十月六日

日韓二重国籍の子の名に使える人名用漢字

戸籍時報 第七四四号 九月

人名用漢字の新字旧字…「梨」と「黎」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十月一三日

人名用漢字の新字旧字…「頼」と「賴」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十月二七日

オフィス機器としての QWERTY キーボード

日本オフィス学会誌 八巻二号 十月

開成石経と拓本文字データベース 漢字字体史研究 二

勉誠出版 十一月

人名用漢字の新字旧字…「年」と「季」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十一月一日

人名用漢字の新字旧字…「舗」と「舖」と「鋪」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十一月二四日

人名用漢字の新字旧字…「庄」と「莊」と「莊」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十二月八日

人名用漢字の新字旧字…「灿」と「燦」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十二月二三日

韓国の人名用漢字と漢字コード

センター研究年報二〇一六 十二月

人名用漢字の新字旧字…干支と人名用漢字

三省堂ワードワイズ・ウェブ 一月五日

人名用漢字の新字旧字…「図」と「圖」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 一月二二日

人名用漢字の新字旧字…「无」と「無」と「寯」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 一月二六日

人名用漢字の新字旧字…「宝」と「寶」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 二月九日

広告の中のタイプライター…IBM Electronic

三省堂ワードワイズ・ウェブ 二月一六日

人名用漢字の新字旧字…「吊」と「弔」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 二月二三日

●日本・中国・台湾・香港・韓国の常用漢字と漢字コード（共著）

京都大学学知創生ユニット 三月

広告の中のタイプライター…Royal KMM

三省堂ワードワイズ・ウェブ 三月二日

人名用漢字の新字旧字…「彈」と「彈」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 三月九日

Adobe-Japan1-6とN 文字図形名の対応 東洋学へのコンピュータ利用 第28回研究セミナー

三月一〇日

広告の中のタイプライター…Renington Noiseless No.10

三省堂ワードワイズ・ウェブ 三月一六日

人名用漢字の新字旧字…「傘」と「傘」と「繖」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 三月二三日

広告の中のタイプライター：Hammond Multiplex

三省堂ワードワイズ・ウェブ 三月三〇日

山 室 信 一

アジアの視点から立憲主義を考える

住民と自治 六三七号 五月一日

●満洲國的實相與幻象（徐滋馨・林琪禎・沈玉慧・黃耀進訳）

八旗文化・台北 五月五日

さしたる意味はない 現代のことば

京都新聞（夕刊） 五月二〇日

「積極的平和主義」とは「軍事介入主義」 広岩近広編『わた

しの〈平和と戦争〉

集英社 六月

一票の重み 現代のことば 京都新聞（夕刊） 七月五日

戦後が戦前に転じるとき 「戦後80年」はあるのか

集英社新書 八月

아시아의 시점에서 입헌주의를 생각한다

말과활 十一号 八月

今が人生のつべん 現代のことば

京都新聞（夕刊） 九月一三日

未完の「東洋平和論」 李泰鎮・安重根ハルビン学会編『安

重根と東洋平和論』

日本評論社 九月

2018年問題 現代のことば

京都新聞（夕刊） 十一月七日

脱真実 現代のことば

京都新聞（夕刊） 十二月二二日

La Première Guerre mondiale dans l'histoire de l'Asie ori-

entale: un regard japonais. *Ebisu* 53号

一月

震災遺構とトモノミクス 現代のことば

京都新聞（夕刊） 三月七日

●憲法九條…非戦思想的水脈與脆弱的和平（許仁碩訳）

八旗文化・台北 三月二二日

만다라（曼荼羅） 로서의 중국 동북아재단 편 『연동하는

동아시아 문화』

역사공간 三月

人

文

第六四号

二〇一七年六月三十日

京都大学人文科学研究所発行

共同印刷工業

非売品